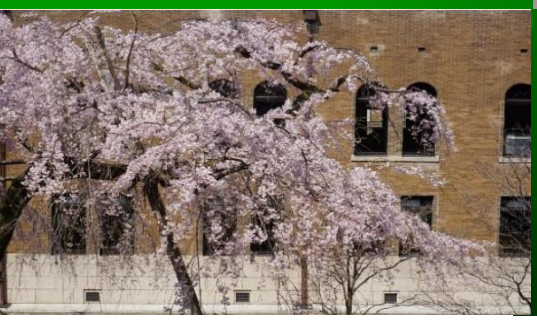
文部科学省国立大学法人運営費交付金（機能強化経費）
健康科学・人間発達科学分野における国際的研究拠点形成

お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
最終報告書

2016 年度～2021年度

健康で心豊かな「人生」を科学する
～ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦～



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
Organization for Human Life Innovation and Development

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構　最終報告書

【　目　　次　】

はじめに（ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構長あいさつ）

１．機構概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．機構における活動実績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
・論文発表数の状況
・国際学会等での発表の状況
・国際学会等での講演等
・シンポジウム等開催実績
・ニュースリリース件数
・学外機関との連携協定等の状況
・共同・受託研究の状況

３．機構における文理融合型共同研究（学内科研）・・・・・・・・・11
・「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究
　―本学学部生を対象としたパネル調査から―（2018 年度採択）」
・「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析
　（2020 年度採択）」

４.「健康支援・教育プログラム（Q&A シリーズ）」の
開発・実践・発信・・・・・・・・・・・・17
（１）Q&A シリーズの規格構成等
（２）お茶の水女子大学附属校園での活用・実践
（３）社会への情報発信～「Q&A 特設ページ」の構築
（４）読者/利用者のプロフィール、アンケート評価等

５．機構主催および学内連携イベント・・・・・・・・・・・・・・・・26
（１）キックオフシンポジウム
（２）文理融合学内科研　研究発表会
（３）ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構国際シンポジウム
（４）その他の学内連携イベント

＜資料編＞
・資料①　国立大学法人お茶の水女子大学
　ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構規則・・・・・・・・・・・・・ 1
・資料②　附属校園における「Q&A シリーズ」活用：
　附属校園　教材・論文データベース公開情報・・・・・・・・・ 4
・資料③　ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構　中間評価実施報告書・・・・・ 7
・資料④　ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構　中間評価対応表・・・・・・ 17
・資料⑤　ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構　最終評価実施報告書・・・・ 23

はじめに

2016 年度からの第 3 期中期目標・中期計画期間に、「人が一生を通じて心身ともに健康で幸せに暮らすための研究と教育を推進する」ことを新たな目標として掲げ、2016 年 4 月にヒューマンライフイノベーション開発研究機構が設置されました。機構の下にはヒューマンライフイノベーション研究所と人間発達教育科学研究所を設置し、それぞれの強みを生かすとともに、協奏して研究・開発・発信を行ってまいりました。

第 3 期中期目標・中期計画期間の最終年度である 2022 年 3 月には、両研究所の研究プロジェクトや事業などについて、全体構想に基づき、6 年間（2016 年度～2021 年度）の進捗状況を確認の上、最終的な評価を実施しました。2020 年 3 月に実施された中間評価を経て、評価結果をもとにさらに研究・開発を推進した結果、各評価委員から、計 6 年間の研究・活動実績に対し、多くの肯定的なご意見をいただくことができました。

途中、コロナ渦により協働活動の進捗が妨げられるなどいくつかの困難がございましたが、その中においても高い評価を受けるに至る活動を行えたことは、今後のヒューマンライフイノベーション開発研究機構および両研究所の研究プロジェクトや事業実施において、大変有意義なものであったと考えます。

特に、6 冊の Q＆A シリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると自負しております。

上記により、本機構は本学における第 3 期中期計画・中期目標の達成にも大いに貢献できたと確信し、今年度から開始された第 4 期中期目標・中期計画においても文理融合型の研究活動を推進し、国際研究拠点の構築に向けた取り組みを行うことにより、本学の国際化をリードする機構を目指していく所存でございます。

第 4 期中期目標・中期計画期間からは、組織改革を実施し、新たな機構や研究所を設置いたしました。本機構とも横断的な協力関係のもと、国際的な研究拠点として発展させていく所存です。本機構へのさらなるご理解とご協力のほどをどうぞよろしくお願い申し上げます。

令和 4 年 8 月

ヒューマンライフイノベーション研究機構長　　石井クンツ昌子

１．機構概要

我が国は、グローバル化と少子高齢化の加速に伴う人口構造の変化などによる社会構造の変化に伴い、新たな社会的諸課題に直面している。お茶の水女子大学では、それら課題の解決に向け、研究・開発を統合的に推進する国際的研究拠点「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」を 2016 年 4 月に開設した。

本機構の下に、「ヒューマンライフイノベーション研究所」と「人間発達教育科学研究所」を設置し、それぞれ本学の強みを活かして、生命科学・生活科学による身体的・環境的側面ならびに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進する。また、幼児期から高齢期までの人の発達段階に即して、人が健康で心豊かに過ごし生活環境を向上させる革新的解決方策を創出し、その成果を社会に向け発信することを目標とする。さらに、機構の業務遂行にあたっては、本学の基幹研究院やグローバル女性リーダー育成研究機構、学内共同教育研究施設との密接な連携をめざしている。

その目標を達成するため、本機構では「国立大学法人お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構規則（本報告書巻末「資料①」参照）」に基づき、「研究機構会議（同規則第 7 条）」を設置し、研究機構の運営及び業務に関する事項を審議している。同会議の議長は研究機構長が務め、議長が必要と認めたときは、機構会議メンバー以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。現在の研究機構会議メンバーは以下のとおりである。

【ヒューマンライフイノベーション開発研究機構　機構会議メンバー】　　2021 年 4 月 1 日現在

森田　育男	研究機構長	第7条第2項（1）
太田　裕治	産学連携を担当する副学長	第7条第2項（2）
藤原　葉子	ヒューマンライフイノベーション研究所長	第7条第2項（3）
大森　美香	人間発達教育研究所長	第7条第2項（4）
森光　康次郎	その他研究機構長が必要と認めたもの	第7条第2項（5）
浜野　隆	その他研究機構長が必要と認めたもの	第7条第2項（5）
秋保　聡	その他研究機構長が必要と認めたもの	第7条第2項（5）

２．機構における活動実績

※各実績の詳細については、別冊「ヒューマンライフイノベーション研究所最終報告書」、「人間発達教育科学研究所最終報告書」で報告する。

【論文発表数の状況】

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
		うち英文		うち英文		うち英文
２０１６年度	１６	１５	４１	６	５７	２１
２０１７年度	２４	２４	３６	１０	６０	３４
２０１８年度	７８	５０	６５	１９	１４３	６９
２０１９年度	６８	５０	４５	１６	１１３	６６
２０２０年度	１０３	６２	５２	２１ （＋印刷中２）	１５４	８３
２０２１年度	７３	５０	４１	２０	１１４	７０

【国際学会等での発表の状況】

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
		うち口頭		うち口頭		うち口頭
２０１６年度	１３	３	２９	６	４２	９
２０１７年度	１２	３	１８	１	３０	４
２０１８年度	３３	４	３３	１７	６６	21
２０１９年度	３６	１１	２０	６	５６	１７
２０２０年度	６	１	９	１	１５	２
２０２１年度	１４	６	１３	１	２７	７

【国際学会等での講演等】

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
		うち 招待講演		うち 招待講演		うち 招待講演
２０１６年度			３	０	３	０
２０１７年度			９	５	９	５
２０１８年度	３	３	１３	１	１６	４
２０１９年度	４	４	１２	０	１６	４
２０２０年度			１	１ （基調講演）	１	１
２０２１年度	４	４	５	２	９	６

【シンポジウム等開催実績（ヒューマンライフイノベーション研究所）】

２０１６年度	2016.7.30 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構　キックオフシンポジウム健康で心豊かな「人生」を科学する～ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦～（主催） 2016.12.13 第１回公開シンポジウム　病気やストレスに負けない“からだ”をつくるための健康イノベーション（主催）
２０１７年度	2017.9.7-8 TIA ナノバイオサマースクール（糖鎖・レクチン）（共催） 2017.9.10-11 第 30 回植物脂質シンポジウム（主催：日本植物脂質科学研究会）（共催） 2017.12.2 第３回日本アネキシン研究会年会（主催：日本アネキシン研究会）（共催） 2017.12.21 第２回公開シンポジウム　病気やストレスに負けない“こころ”と“からだ”をつくるための健康イノベーション（主催）

	2018.2.3 第20回脂質栄養シンポジウム「脂質の消化・吸収と代謝の最前線」（主催：日本栄養・食糧学会関東支部）（後援）
２０１８年度	2018.9.6-7 平成30年度 ナノテクキャリアアップアライアンス　TIAナノバイオ サマースクール（糖鎖・レクチン）（共催） 2018.11.17 第102回日本栄養・食糧学会　関東支部大会シンポジウム「脂質と疾患の最新情報」（主催：日本栄養・食糧学会関東支部）（共催） 2018.12.20 第3回公開シンポジウム　健康な命をまもるイノベーション（主催）
２０１９年度	2019.7.8 セミナー：「ショウジョウバエにおける新規抗ウイルスdSTING/dIKKβ/NF-κB経路の発見」（主催：後藤真里特任准教授）（後援） 2020.2.13 第 1 回日中合同食育プロジェクトシンポジウム(主催：文京区立お茶の水女子大学こども園）（共催：中止） 2020.3.16 ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構国際シンポジウム（主催：中止）
２０２０年度	2020.12.23 ムーンショット型農林水産研究開発事業 『地球規模の食料問題の解決と人類の宇宙進出に向けた昆虫が支える循環型食料生産システムの開発』キックオフシンポジウム(共催） 2021.1.8 ヒューマンライフイノベーションセミナー 「腸脳力！～最強の体内物質がヒトを変える～」（共催） 2021.3.27 「グローバルリーダーとは― 今、そして 未来に向けて―（オンライン)」（共催）
２０２１年度	2021.9.16 文理融合学内科研 研究発表会「発達障害児の養育等の環境要因に対する 脳神経学的な解析」(共催)

	2021.11.15-21 日本健康心理学会第34回大会 アフターコロナ時代の健康心理学をめざして（共催） 2021.12.17 生物＆HLI・EHD研究所共催セミナー 父加齢の次世代の影響についてエピジェネティクスで理解する（共催） 2022.3.7 生物＆HLI研究所共催セミナー メダカが語る脊椎動物の発生のしくみーかたち作りからゲノム、エピゲノムまで（共催） 2022.3.14 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構国際シンポジウム 健康で心豊かな「人生」を科学する -ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦― 2022.3.19 第24回　健康栄養シンポジウム 「食品成分による健康機能の作用機序を知る」（主催：日本栄養・食糧学会関東支部）（後援）

【シンポジウム等開催実績（人間発達教育科学研究所）】

２０１６年度	2016.6.10&14　中国幼児教育訪日代表団視察研修受け入れ（主催） 2016.7.22　第 1 回国際セミナー「複雑性悲嘆：喪失後ストレス障害」（主催） 2016.7.30　「ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構」キックオフシンポジウム（共催） 2016.8.2-4　第3回ライフ×アート展（共催） 2016.11.5　日本カリキュラム学会秋セミナー「カリキュラムマネジメントを考える」（共催） 2016.11.17&22 第5・6回「子どもの世界をのぞいてみよう」（共催） 2017.2.14　平成28年度東京都ひきこもりサポートネット活動報告会（共催） 2017.3.5　第1回お茶の水女子大学大こども園フォーラム（共催） 2017.3.13　平成28年度人間発達教育科学研究所成果報告会(主催)
２０１７年度	2017.4.22　日本子ども学会主催“子ども学カフェ”第 8 回講演会（共催）

	2017.5.9　子育て支援 in セブ島～現地コーディネータが語る（共催） 2017.7.8　国際セミナーⅡ「音楽療法と発達理論～Schumacher 博士をお迎えして」（共催） 2017.7.14&28　ひきこもりサポーター養成研修（共催） 2017.7.27　Joseph J. Tobin 教授と林安希子さんを囲んで（共催） 2017.8.2～4　第４回ライフ×アート展（共催） 2017.8.18　日本双生児研究学会主催第 37 回双生児研究会（共催） 2017.9.20　スリランカ政府訪問団受け入れ（保育・教育実践研究部門）（主催） 2017.11.4　日本カリキュラム学会「秋のセミナー2017」（共催） 2017.11.6&13　グローバルリーダーシップ研究所　第 7･8 回「子どもの世界をのぞいてみよう」（共催） 2017.11.27　第 1 回お茶大こども園スペシャル研修会（共催） 2017.11.29　中国蘭州・西寧・北京の幼稚園を訪問して～ユニバーサルな保育はあるのか～（保育実践研究）（主催） 2017.12.1　東京都若者社会参加応援事業「社会参加準備支援講座」（共催） 2017.12.17　人間発達教育科学研究所 2017 年度シンポジウム（人間発達基礎研究部門）（主催） 2018.2.18　第 2 回文京区立お茶の水女子大学こども園フォーラム（共催） 2018.2.20　東京都ひきこもりサポートネット平成 29 年度活動報告会（共催） 2018.3.3　JBBY 希望プロジェクト「困難を抱える子どもたちと本の役割」第 4 回「原発災害と福島の母子のこころの問題」（後援） 2018.3.17-18　CRN アジア子ども学交流プログラム（共催） 2018.3.21　平成 29 年度末成果報告会（主催）
２０１８年度	2018.5.15　国際セミナー「マインドフル・イーティング」（主催） 2018.7.25　国際セミナー「心理療法の文脈的モデル」（主催） 2018.7.31～8.2　第５回ライフ×アート展（共催） 2018.9.26　国際セミナー「イギリス幼児教育におけるプロジェクト実践とその展開」（共催） 2018.10.12　公開シンポジウム「中国における幼児教育の現状と課題」（主催） 2018.10.31＆11.23　ECCELL 公開講座「乳幼児の表現をはぐくむワー

	クショップ」（共催） 2018.11.13&20 グローバルリーダーシップ研究所　第9･10回「子どもの世界をのぞいてみよう」（共催） 2019.2.17 第3回文京区立お茶の水女子大学こども園フォーラム（共催） 2019.3.21 小中校の体系的指導で育てる統計的問題解決力～PPDACの授業を児童生徒とどうつくるか（共催） 2019.3.26 平成30年度成果報告会（主催）
２０１９年度	2019.5.24 ドキュメンテーションとストーリーによるアメリカの幼児教育における評価とは（共催） 2019.8.6-8 第6回ライフ×アート展（(共催） 2019.10.26＆2020.2.15 2019年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座「乳幼児の表現をはぐくむワークショップ」（共催） 2019.10.24 国際セミナーInterruption Driven Academia: Staying afloat and on task（主催） 2019.10.24 国際セミナーSociocultural models of body image and eating concerns: From risk factor to individual and universal prevention（主催） 2019.11.6 ボディイメージと食行動に関する社会文化的モデル―リスクファクターから予防まで―（共催） 2019.12.3 Peter Moss & 佐藤学スペシャルトーク 「レッジョ・インパクトを再考する」（共催） 2019.12.12 中日における就学前教育交流論壇～華東師範大学学術報告（共催） 2020.2.13 第1回日中合同食育プロジェクトシンポジウム(共催：中止） 2020.2.16 第4回文京区立お茶の水女子大学こども園フォーラム 2020.3.16 ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構国際シンポジウム（主催：中止） 2020.3.20 第3回統計教育シンポジウム「小中校の体系的指導で育てる統計的問題解決力～PPDACサイクルを通して方法知を身に付ける」（共催：中止）
２０２０年度	2020.11.14&23 2020年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座「子育て支援フィールドワーク」（共催：オンライン）

	2021.2.20　第83回教育実際指導研究会（後援：オンライン） 2021.3.20　お茶大附属学校園（連携研究算数・数学部会）第４回統計教育シンポジウム（共催：オンライン） 2021.3.22　お茶大 ECCELL-BP ミニフォーラム「2019－2020 保育者のアンラーニングは今」（部門主催：オンライン） 2021.3.27　「グローバルリーダーとは― 今、そして 未来に向けて―」（連携共催：オンライン）」 2021.3.28　第 5 回文京区立お茶の水女子大学こども園フォーラム（後援：オンライン）
２０２１年度	2021.9.16　文理融合学内科研 研究発表会「発達障害児の養育等の環境要因に対する 脳神経学的な解析」(共催) 2021.9.28　「ドイツ社会の多文化化と移民の子育て支援―1970 年代から今日まで（共催：オンライン」 2021.10.27～　2021 年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座「乳幼児のくらし A/B」（共催：オンライン：12/15 まで全６日） 2021.11.15-21　日本健康心理学会第 34 回大会「アフターコロナ時代の健康心理学をめざして（共催） 2021.12.17　生物＆HLI・EHD 研究所共催セミナー「父加齢の次世代の影響についてエピジェネティクスで理解する（共催） 2022.2.20&27　2021 年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座「からだ・表現ワークショップ A/B」（共催：オンライン） 2022.3.14　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構国際シンポジウム「健康で心豊かな「人生」を科学する-ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦―」 2022.3.20　第６回文京区立お茶の水女子大学こどもフォーラム（共催：オンライン） 2022.3.21　お茶大附属学校園（連携研究算数・数学部会）第５回統計教育シンポジウム（共催：オンライン）

【ニュースリリース件数】

２０１６年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　1 件 人間発達教育科学研究所　1 件
２０１７年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　6 件 人間発達教育科学研究所　11 件
２０１８年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　23 件 人間発達教育科学研究所　40 件
２０１９年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　53 件 人間発達教育科学研究所　35 件
２０２０年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　19 件 （内訳：新聞 5 件；雑誌 14 件） 人間発達教育科学研究所　42 件 （内訳：ウェブ 11 件；新聞 7 件；雑誌 24 件）
２０２１年度	ヒューマンライフイノベーション研究所　9 件 （内訳：ウェブ 3 件；新聞 3 件；雑誌 1 件；その他 2 件） 人間発達教育科学研究所　22 件 （内訳：ウェブ 3 件；新聞 5 件；雑誌 14 件）

【学外機関との連携協定等の状況】

２０１７年度	連携先：国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター 平成 29 年 7 月～ 連携・協力に関する協定を締結。人間発達教育科学研究所が、当センターと発達障害児の長期追跡研究等を推進する体制を整備。
２０１８年度	連携先：国立研究開発法人国立成育医療研究センター 平成 30 年 11 月～ 連携・協力に関する協定及び覚書を締結。我が国の成育医療研究の発展に寄与し、共同研究等の研究協力、研究交流等を実施。

【共同・受託研究の状況】

○受託研究

※（　）内は新規分

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
２０１６年度	2	910 千円	3	4,330 千円	5	5,240 千円
２０１７年度	1(1)	1,980 千円 (1,980)	4(2)	2,974 千円 (2,804)	5(3)	4,954 千円 (4,784)
２０１８年度	4(2)	9,292 千円 (3,792)	4(2)	8,918 千円 (5,750)	8(4)	18,210 千円 (9,542)
２０１９年度	3(1)	8,665 千円 (1,350)	1	500 千円	4(1)	9,165 千円 (1,350)
２０２０年度	5(3)	27,651 千円 (21,585)	0	0	5(3)	27,651 千円 (21,585)
２０２１年度	8(2)	121,774 千円 (23,010)	0	0	8(2)	121,774 千円 (23,010)

○受託事業

※（　）内は新規分

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
２０１６年度	0	0	0	0	0	0
２０１７年度	0	0	0	0	0	0
２０１８年度	10(3)	24,217 千円 (7,690)	2(2)	10,046 千円 (10,046)	12(5)	34,263 千円 (17,736)
２０１９年度	8(1)	16,492 千円 (2,262)	1(0)	595 千円	9(1)	17,087 千円
２０２０年度	9(1)	16,987 千円 (1,900)	0	0 千円	9(1)	16,987 千円 (1,900)
２０２１年度	8(0)	12,753 千円	0	0 千円	8(0)	12,753 千円

○共同研究　　※（　）内は新規分

	ヒューマンライフ イノベーション研究所		人間発達教育科学研究所		合　計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
２０１６年度	5	1,100 千円	1	0	6	1,100 千円
２０１７年度	10(5)	4,132 千円 (2,200)	2(1)	3,017 千円 (3,017)	12(6)	7,149 千円 (5,217)
２０１８年度	21(9)	12,775 千円 (8,843)	1(1)	141 千円 (141)	22(10)	12,916 千円 (8,983)
２０１９年度	17(1)	12,075 千円 (1,009)	1(1)	2,200 千円 (2,200)	18(2)	9,855 千円 (3,209)
２０２０年度	17(2)	11,775 千円 (0)	0	0	17(2)	11,775 千円 (0)
２０２１年度	12(1)	5,355 千円 (0)	1(1)	50,000 千円 (50,000)	13(2)	55,355 千円 (0)

３．機構における文理融合型共同研究（学内科研）

お茶の水女子大学では、2014 年度より、異なる研究分野による文理融合型研究プロジェクトへの支援を通じ、本学における研究の質の向上、および研究活動の活性化を目的として「共同研究用経費（学内科研）」が開始された（文理融合型プロジェクトへの支援としたのは 2017 年度から）。

毎年度、1～2 件程度に対して支援上限額は年間 200 万円で運用されており、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、2018 年度に1件、2020 年度に1件採択されている。

研究テーマ：　女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究
―本学学部生を対象としたパネル調査から―
【2018 年度採択】

（１）研究メンバー

【研究代表者】

小林　哲幸　　基幹研究院　自然科学系　教授

【研究分担者】

藤原　葉子　　基幹研究院　自然科学系　教授
赤松　利恵　　基幹研究院　自然科学系　教授
石川　朋子　　ヒューマンライフイノベーション研究所　特任准教授
大森　美香　　基幹研究院　人間科学系　教授

菅原　ますみ　　基幹研究院　人間科学系　教授
岩壁　茂　　基幹研究院　人間科学系　教授
内海　緒香　　人間発達教育科学研究所　特任講師

（２）本研究の目標

子ども期から高齢期までを対象とした「健康支援・教育プログラム」の開発およびその教育場面における実装を推進していくことを目標として、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、本機構を構成する 2 つの研究所（ヒューマンライフイノベーション研究所・人間発達教育科学研究所）による心身の健康創出に関する文理融合研究を実施した。対象とした健康問題は、生活習慣病、メンタルヘルス（うつ病・食行動異常等のストレス性疾患）、発達障害、インフルエンザや結核等の感染症である。

具体的には、青年期から成人萌芽期にある女性（18 歳～20 歳代前半）を対象として質問紙調査を実施し、当該テーマに関する基礎的資料を得ることを目的とした。

（３）調査の概要

上記の目的を達成するために、経年 2 時点（2018 年 11 月～12 月・2019 年 11 月～12 月）で、お茶の水女子大学の全学部学生を対象とする全数調査およびお茶の水女子大学の一部の学部学生を対象とするインテンシブ調査を実施した。

調査内容は、心身の健康（発達障害傾向、食行動、食習慣、身体像、生活満足度、感染症等）、生活習慣（睡眠習慣、運動習慣、ソーシャルメディア利用状況等）、個人差要因（パーソナリティ傾向、思考傾向、情報リテラシー等）である。

なお、一部学生を対象とするインテンシブ調査を設定した理由は、その調査内容に健康クイズが含まれており、正解を教場でフィードバックする必要があるためである。

全数調査の調査票は、2018 年は、コース事務室等を通して 1388 部を配布し、542 部を回収した（回収率 39.0%）。2019 年は、両研究所所属の教員の担当する講義で 793 部を配布し、大学内に設置した回収箱で 298 部を回収した（37.6%）。インテンシブ調査の調査票は、両研究所所属の教員の担当する講義で、2018 年は 312 部を配布し、311 部をその場で回収した。2019 年は 412 部を配布し、全数をその場で回収した。

（４）本研究の成果

本研究は、文理、2 つの研究所の研究者がそれぞれの専門性を活かし実施した文理融合型の調査研究である。女子大学生を対象にして、心身の健康に関する栄養学、心理学等の多様な領域のデータを 2 か年にわたり収集した。その結果、「健康支援・教育プログラム」作成に資する基礎的資料の獲得という当初の目的が達成された。

たとえば、食生活に関しては、栄養学における栄養教育・食育の考え方に、心理学におけるマインドフルネスおよび食に対する感謝の概念を反映させることにより、食生活の詳細な測定

に有用な「拡張版食べるマインドフルネス尺度」が開発された。この尺度を用いて、食を通して健康的な生活の実現を目的とする「健康支援・教育プログラム」の開発に対する身体面・心理面の両側面からのアプローチが可能となる。また、発達障害に関しては、本研究によって、神経学的な側面での特徴である感覚処理異常と心理社会的な側面である情緒や対人関係の問題との関連が明らかになった。この結果から、心理社会的な問題を解決するためには教育環境の改善が一つの有効な方策であることを示唆する新たな知見が得られた。感染症に関しては、本研究の調査によって、予防行動の啓発および促進のためにターゲットとすべき行動が明らかとなった。

以上に示されたように、本調査研究の成果は文理融合型研究の重要性や有効性を示唆するものである。今後、本調査研究で得られた基礎的な資料や知見をもとに、「健康支援・教育プログラム」の開発を両研究所協働のもとに進め、実装をおこなっていく予定である。

（５）成果発信

【論文】

国際誌 4 件

・Development and validation of Expanded Mindful Eating Scale. *International Journal of Health Care Quality Assurance*, *33* (4/5), 30-321.

・Is mindful eating sustainable and healthy? A focus on nutritional intake, food consumption, and plant-based dietary patterns among lean and normal-weight female university students in Japan. *Eating and Weight Disorders*, 2020

・Later chronotype is associated with unhealthful plant-based diet quality in young Japanese women. *Appetite*, *166*

・Mediating role of abnormal sensory processing in the relationship between autistic traits and internalizing problems（投稿中）

・Association of healthy eating literacy and resident status with vegetables and fish consumption among lean and normal-weight female Japanese university students（投稿中）

国内誌 1 件

・女子大学生における自閉症スペクトラム傾向と内在化問題の関連―感覚処理異常に注目した検討―

【学会発表】

国際学会 4 件、国内学会 2 件

・The effects of Instagram photos on women's body image. 7th Asian Congress of Health Psychology Kota Kinabalu, Malaysia 2019.9.21.

・食費に「お金をかけることは惜しまない」女子大学生の食生活　第 66 回栄養改善学会学術総会（富山）

・The association between orthorexia nervosa and Instagram use among Japanese women.

Virtual International Conference on Eating Disorders 2020, Online, June 11-30, 2020.

・Association between dietary intake patterns and psychological factors. The 32th International Congress of Psychology, Online, July 18-23, 2021.

・The effect of nutrition literacy on the relationship between nutrition-related information-seeking behavior and eating behaviors among Japanese university women. 35th Annual Conference of the European Health Psychology, Online, August, 23-27, 2021.

・Instagram の写真の閲覧・投稿行動とボディイメージとの関連 日本健康心理学会第 33 回大会 2020.11.16-11.22.

研究テーマ：発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析

【2020 年度採択】

（１）研究メンバー

【研究代表者】

宮本 泰則　　ヒューマンライフイノベーション研究所 教授

【研究分担者】

上原 泉　　人間発達教育科学研究所 准教授

後藤 真里　　ヒューマンライフイノベーション研究所 特任准教授

今泉 修　　人間発達教育科学研究所 助教

毛内 拡　　基幹研究院 自然科学系 助教

（２）本研究の分担役割

宮本 泰則　研究のデザインと動物実験及びモデル動物の作成

上原 泉　発達心理から見た解析

後藤 真里　ミクログリア細胞を用いた解析

今泉 修　認知心理から見た実験結果の解析結果の検討

毛内 拡　マウス脳におけるアストロサイト活性化状態の可視化の解析

（３）本研究の成果

【宮本泰則 担当分の成果】

発達障害、特に自閉症が関係していると言われるミクログリア細胞に着目して解析を進めた。我々の研究室において、環状ホスファチジン酸誘導体 2 cc PA を脳に対して物理的な傷害を誘導する外傷性脳損傷の系を用いて、2cc PA の効果を解析した。その結果、外傷性脳損傷部位の周囲のミクログリアの活性化の2cc PA による抑制効果や神経傷害性のミクログリアの割合の低下を誘導することを明らかにした（Hashimoto, et al., 2018 ）。この成果をもとに、ミクログリアがなぜ2cc PA により活性化抑制されるのかについて、アストロサイトと呼ばれるグリア細胞の関与を明らか

にした（未発表データ）。さらにこのアストロサイトにおいて、2ccPA が、神経保護効果を示す機構を明らかにした。それは、2 cc PA がアストロサイトから、細胞外マトリックスと呼ばれる細胞の外で、細胞の活動を制御する因子の一つであるテネイシン C が関わっていることを明らかにした（Nakashima, et al., 2021）。

研究業績

Mari NAKASHIMA, Mari GOTOH, Kei HASHIMOTO, Misaki ENDO, Kimiko MURAKAMI-MUROFUSHI, Hiroko IKESHIMA-KATAOKA, Yasunori MIYAMOTO. "The neuroprotective function of 2-carba-cyclic phosphatidic acid: implications for tenascin-C *via* astrocytes in traumatic brain injury" *J. Neuroimmunol.* (2021) 361: 577749

【上原泉　担当分の成果】

定型発達の幼児を対象に、感情理解の発達過程を、心の理論、実行機能の発達度合いとの関連を含めて検討した（鄭・上原，調査継続中）。状況説明から判断する登場人物の感情の理解を調べる課題から、「喜び」の理解は年少児から発達しているが、「悲しみ」と「驚き」の理解は年長児にならないと難しいこと、「怒り」と「恐怖」の区別は年長児でも難しいことが示された。この結果は、海外の知見と類似していた。登場人物が実際の感情とは別の感情を表向きには示すような場合のその理解（感情視点取得課題で検討される感情の理解）については、年長児でも難しいことが示された。心の理論、実行機能については、年中児から年長児の間に、より発達が進む可能性が示されたが、海外より、心の理論の発達は少し遅い一方、実行機能（DCCS:認知の柔軟性）の発達は少し早い可能性を示すものであった。予想に反し、感情理解課題の成績は、心の理論課題成績との間ではなく、実行機能課題成績との間で有意な関連が示された。心の理論の形成が遅く、感情理解を苦手とする ASD の子どもたちの知見、感情理解に弱みはみられないが、実行機能に弱みのある ADHD の子どもたちの知見と比較し考察した。認知発達の中核をなす、感情理解、心の理論、実行機能の発達的関係性を明らかにするため、今後、ASD や ADHD の特性に関するデータ収集も視野に、定型発達児のデータをさらに集積し、検討を続けたい。

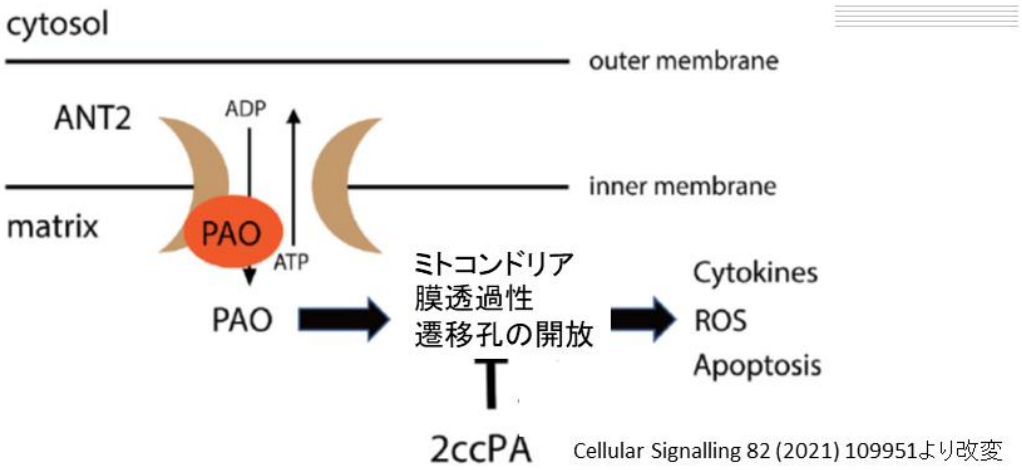
【後藤真里　担当分の成果】

環状ホスファチジン酸(cyclic phosphatidic acid, cPA)は、抗がん、神経細胞保護、疼痛抑制、など多岐に渡る生理活性を持つ生理活性脂質である。これまでに cPA の安定化誘導体 2ccPA を用いて薬剤への応用を目指した研究を発展させてきた。しかしながら、cPA や 2ccPA 特異的な受容体や結合タンパク質はいまだ見つかっていなかった。そこで、我々は cPA,2ccPA 特異的な受容体や結合タンパク質をアフィニティークロマトグラフィーで単離することを計画した。まず、2ccPA の側鎖にアジド基を導入した 2ccPA-N3 を合成しクリック反応でアルキン基を持つナノ磁性ビーズと結合させた。2ccPA 結合ナノ磁性ビーズを担体としてミクログリアの細胞画分と混合させ、2ccPA 結合タンパク質を単離した。単離した 2ccPA 結合タンパク質は質量分析法によりミクログリアのミトコンド

リアに発現する Adenine nucleotide translocase2(ANT2)であることを同定した。さらに、2ccPA と ANT2 の相互作用により強酸化剤が引き起こすミクログリアのアポトーシスを抑制されることを明らかにした。

現在、様々な神経変性疾患(アルツハイマー、パーキンソン病など)では、ミトコンドリアの機能異常とアポトーシスが認められている。また、脳の発生、発達にも脳細胞のアポトーシスの関与が示唆されている。本研究成果は、これまでの環状ホスファチジン酸の生理活性の機序解明につながる可能性や、環状ホスファチジン酸が神経変性疾患や異常な脳の形成や老化予防などを対象とした治療薬になる可能性があると考えている。

本研究成果は Cellular Signalling 82 (2021) 109951 に発表した。



【今泉修　担当分の成果】

発達障害児の有する特徴的な心理的特性に対する環境要因の影響について，今泉助教らは自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder: ASD）における感覚処理異常を検討した。ASDの特徴の一つである感覚処理異常（過敏と鈍麻）は，感覚処理異常がもたらす不安や抑うつといった「内在化問題」に関連する。しかし，感覚処理異常と内在化問題の間を媒介する心理的変数は十分には検討されていなかった。そこで本研究は，学校生活において感覚処理異常によってどれほど困っているか，という「困り感」に着眼した。そして，困り感が感覚処理異常傾向と内在化問題の関連を媒介するという仮説を立てて，ASDと定型発達の小・中学生を対象に質問紙調査を行った。その結果，通常学級に通うASD児は，特別支援学級に通うASD児と同程度の感覚処理異常傾向であったが，感覚処理異常に関する困り感は特別支援学級に通うASD児よりも高かった。このことは，ASD児の支援がより豊かな特別支援学級という環境が困り感を弱める可能性を示唆する。さらに多変量解析によって，困り感が感覚処理異常傾向と内在化問題の関連を媒介することが示唆された。以上より，通常学級のASD児において，感覚処理異常に関する困り感が特別支援学級に通うASD児に比べて高く，その困り感が内在化問題を高めることが示唆された。感覚処理異常およびそれに対する主観的な困り感に注目した支援の重要性は高いと考えられ，それに向けてさらなる心理的・神経的基礎知見の蓄積が必要とされる。本研究成果は日本心理学会第85回大会において優秀発表賞を受賞した（辻ら，2021）。

【毛内拡　担当分の成果】

アストロサイトは、進化的に複雑な脳を持つ生物ほど大脳皮質に占める割合が増加し、ヒトではマウスと比べて大きく複雑な突起を持つことが報告されている。ヒトグリア前駆体細胞をマウスに移植することで、マウス脳内でヒトアストロサイトが増殖し、その結果として、細胞内 Ca^{2+}シグナルの亢進や、シナプス可塑性の誘導、記憶・学習の効率上昇等が報告されており、アストロサイトの知性との関与が示唆されている。しかしながら、ヒトアストロサイトのどの要素が、上記のような機能向上に関与しているかは明らかになっていない。

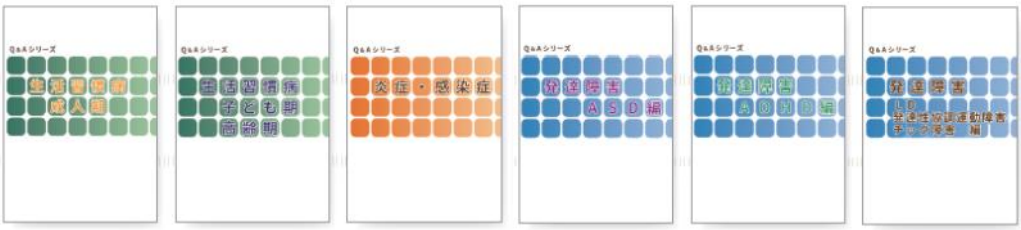
これまで我々は、経頭蓋直流電気刺激よってシナプス可塑性が誘導されるメカニズムにおいて、α1 型アドレナリン受容体（ADRA1A）を介したアストロサイトの細胞内 IP/Ca^{2+}シグナルが重要な役割を果たすことを報告してきた。さらに我々は、アストロサイトに固有の膜機能タンパク質（アドレナリン受容体、グルタミン酸トランスポーターやアクアポリン 4 等）をゲノムワイドに解析した結果、ADRA1A にヒト特異的な遺伝的変異を見つけ、正の自然選択を受けることを見出した（未発表）。

本研究では、ADRA1A のヒト特異的遺伝的変異を GFAP の下流に導入した遺伝子改変マウスを独自に作製し、この遺伝子改変マウスの生理機能の解析を行った。これまでに体重が優位に増加する傾向や、日中の行動量が増える傾向などの目立った表現型が観察されている。一方で、痛みや不安行動などには優位な差は見られなかった。体重が増加する原因として、日中の行動量の増加の他にも、腸に発現する腸管グリア細胞の機能亢進も考えられる。したがって腸機能にも着目した解析を行う予定である。さらに今後は、シナプス可塑性や細胞内 Ca^{2+}シグナルに着目した解析も視野に入れる。

４．「健康支援・教育プログラム（Q&A シリーズ）」の開発・実践・発信

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、同機構に属するヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育科学研究所（IEHD）の研究成果を広く社会に発信するため、「健康支援・教育プログラム」の開発をミッションのひとつとしている。その一環として教育や福祉、医療等に関わる広範囲な読者を想定した「Q&A シリーズ」を 2020～2021 年度に刊行した（非売品）。「生活習慣病」「発達障害」「炎症・感染症」の3つのコアテーマについて、Question とそれに対する Answer という構成の A5 判ブックレット（全 6 冊）として企画・制作した。本冊子を学校の授業や職場の研修等、幅広い現場で活用できるよう、関係機関に無料配布するとともに、冊子 PDF データを両研究所の「Q&A 特設ページ」にて公開し、希望者は無料ダウンロードができるようにした（詳細は**（３）社会への情報発信～「Q&A 特設ページ」の構築**を参照）。

●「Q&A シリーズ」全 6 冊表紙イメージ



（１）Q&A シリーズの規格構成等

タ　イ　ト　ル	仕　様	編集/発行
「生活習慣病 成人期」	A5 判　65 頁	ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究所
「生活習慣病 こども期・高齢期」	A5 判　75 頁	
「炎症・感染症」	A5 判 107 頁	
「発達障害 ASD 編」	A5 判　90 頁	人間発達教育科学研究所
「発達障害 ADHD 編」	A5 判　70 頁	
「発達障害 LD・発達性協調運動障害・チック障害編」	A5 判　78 頁	

※発行部数は各冊子 1,000 部。

（２）お茶の水女子大学附属校園での活用・実践

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構では、お茶の水女子大学附属校園との共同の取り組みとして、「Q&A シリーズ」6 冊の教材化にも挑戦し、附属校園の授業等での活用や実践を行った。 また、その成果を、お茶の水女子大学学校教育研究部の「附属校園　教材・論文データベース(https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/)」に掲載し、学内外の教育現場における幅広い活用を推進した。

●附属校園における「Q&A シリーズ」活用の概要　　**※詳細は資料②参照**

校種	使用コンテンツ	科目・活動	授業計画
附属幼稚園	感染症 生活習慣病	保護者会	保護者あての保健便りで取り上げ、関心をもった保護者に冊子とアンケートを配布
附属小学校	発達障害:LD	個別支援 (小 1)	小 1 LD 児に対する教室実践 トークンと「SOAP」記述を用いた自尊感情と社会的スキルの涵養～個別支援と学級の文化形成の関わりに着目して～
	生活習慣病	社会科 (小 6)	縄文時代と弥生時代はどちらが健康かについて食(栄養素)から考える 「縄文と弥生，生きるならどちらが幸せか」における活用事例
	感染症	保健体育 養護教諭 (小 6)	新型コロナウイルス感染症ワクチンの接種等の予防行動について考える 病気の予防　感染症の歴史から学ぼう～with コロナの時代を生きていくために」
附属中学校	生活習慣病	保健体育 (中 3)	ジグソー学習 生活習慣の予防　:健康な生活と疾病の予防
附属高校	生活習慣病	保健体育 (高 1)	がん教育 がんを理解し、実生活で何ができるか考える
	生活習慣病	保健体育 養護教諭	女性の健康:骨量やホルモンの変化(更年期障害等)

（３）社会への情報発信～「Q&A 特設ページ」の構築

ヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育科学研究所（IEHD）が作成した「Q&A シリーズ（全 6 冊：各 1,000 部）」については、両研究所ホームページでの無料公開に合わせ、教育現場や医療・福祉等の専門/支援機関等、主要なニーズ層に冊子を寄贈または一括送付した。

さらに、より広く社会に情報発信するため、両研究所ホームページに「Q&A 特設ページ（※）」を開設し、フィードバックのためのアンケートフォームを含む、全タイトルの PDF の無料ダウンロードシステムを構築した。このシステムにより、ダウンロード者の基本情報（属性や使用目的等）やコンテンツに対する評価・意見も回収することができ、プログラムの教育的・社会的評価の検討にもつなげることができた。さらに、実際の冊子の入手希望者に対しては、「郵送料のみ自己負担」で郵送サービスも行った。　※Q&A 特設ページ　http://www-w.cf.ocha.ac.jp/iehd/qa-series/

●「Q&A シリーズ（冊子）」の無料配布概況

冊子名	主な無料（一括）配布先
生活習慣病「成人期」	教育委員会（都道府県、政令都市等）、都内保健所（健康推進関連部署）、放送大学、NPO 法人 生活習慣病防止に取り組む市民と医療者の会（小象の会）、 文京区内区立中学校・高校、学生の実習先（病院、保健所）、附属幼稚園、お茶の水女子大学食物栄養学科学生（教材として）等（約 1800 冊）
生活習慣病「子ども期・高齢期」	
炎症・感染症	
発達障害「ASD 編」	教育委員会（都道府県、政令都市等）、都内保健所、都内 23 区教育委員会特別支援担当部署、福祉担当部署）、児童発達支援センター（学内科研アンケート調査協力団体）、新聞社、学内外の研究機関/研究者等（約 1800 冊）
発達障害「ADHD 編」	
発達障害「LD 他編」	

●「Q&A シリーズ（冊子）」へのアクセス（利用）状況について　※2022/3 月末

冊子名	PDF ダウンロード	web アンケート回答	資料請求（冊子郵送）
生活習慣病「成人期」	９５件	１１件	２５冊
生活習慣病「子ども期・高齢期」	７０件	６件	２６冊
炎症・感染症	６０件	４件	２６冊
発達障害「ASD 編」	５３７件	３８件	２２９冊
発達障害「ADHD 編」	４１５件	２４件	２２９冊
発達障害「LD 他編」	３９７件	２１件	２２６冊

（４）読者/利用者のプロフィール、アンケート評価等

●PDF ダウンロード者の属性

両研究所ともに、医療機関への一括送付を行わなかったにもかかわらず、全6冊とも医師や医療関係、心理職によるダウンロード（DL）が目立つ。想定ターゲットの教育・福祉関係者による DL 数

が意外と増えず、一般個人へのアウトリーチに大きな課題が残った。

職業等	発達障害「ASD」	発達障害「ADHD」	発達障害「LD 等」	生活習慣病「子/高齢期」	生活習慣病「成人期」	炎症・感染症
医師	38.4%	38.4%	36.1%	31.5%	16.9%	23.9%
医療関連	6.4%	8.1%	8.5%	11.1%	7.8%	13.0%
心理職	12.2%	11.0%	12.7%	13.0%	10.4%	10.9%
福祉関連	4.1%	3.5%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%
教育関連	2.3%	2.7%	2.8%	1.9%	0.0%	4.3%
保育士・幼稚園教諭	2.7%	3.2%	3.0%	1.9%	6.5%	2.2%
小・中・高教員	5.0%	5.1%	6.3%	1.9%	7.8%	6.5%
大学教員	3.9%	4.0%	4.4%	13.0%	16.9%	10.9%
児童関連	2.1%	2.7%	2.8%	0.0%	1.3%	2.2%
公務員	2.3%	2.4%	2.5%	3.7%	2.6%	2.2%
会社員	2.9%	3.0%	2.5%	0.0%	3.9%	4.3%
研究者	0.6%	0.5%	0.6%	1.9%	1.3%	2.2%
自営・自由業	0.6%	0.8%	1.7%	0.0%	2.6%	0.0%
主婦	1.4%	0.5%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%
学生	2.1%	2.2%	2.2%	7.4%	3.9%	8.7%
無職	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
記入なし	12.4%	11.8%	10.5%	13.0%	18.2%	8.7%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

●PDF ダウンロード者の利用目的

ダウンロード者の利用目的は、その属性とも関係してくるが、発達障害シリーズは「診療・臨床」と「自己学習」に、生活習慣病と炎症・感染症は「自己学習」に主に利用されている。一方、発達障害シリーズは職場の研修に利用される点が特徴的であるものの、全冊とも「教育」目的で使用されることが想定以上に少なかった。当事者の利用が少ないことも今後の課題である。

職業等	発達障害「ASD」	発達障害「ADHD」	発達障害「LD 等」	生活習慣病「子/高齢期」	生活習慣病「成人期」	炎症・感染症
診療・臨床	30.8%	36.3%	34.7%	29.6%	14.1%	23.9%
自己学習	36.8%	32.0%	33.6%	42.6%	50.0%	60.9%
教育	2.1%	2.7%	3.9%	5.6%	3.8%	2.2%
研修	12.4%	10.2%	10.2%	7.4%	3.8%	2.2%
当事者	3.9%	1.9%	2.5%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	0.8%	1.1%	1.4%	1.9%	5.1%	2.2%
記入なし	13.2%	15.9%	13.8%	13.0%	23.1%	8.7%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

【ヒューマンライフイノベーション研究所：読者アンケート結果】

ヒューマンライフイノベーション研究所では、附属幼稚園保護者に Q&A シリーズ「生活習慣病：子ども期・高齢期」「生活習慣病：成人期」「炎症・感染症」の 3 冊を配布し、読者アンケートを行った（2021 年 10 月上旬実施）。

●Q&A シリーズ「生活習慣病：子ども期・高齢期」「生活習慣病：成人期」「炎症・感染症」読者アンケートの評価結果

＜回答者プロフィール概要＞

性別	人数(%)
女性	57 名（88）
男性	5 名（8）
その他	0 名（0）
記入なし	3 名（4）
計	65 名（100）

年代	人数(%)
20 代	1 名（2）
30 代	21 名（32）
40 代	39 名（60）
50 代	1 名（2）
その他	0 名（0）
未記入	3 名（4）
計	65 名（100）

附属幼稚園の保護者が対象なので必然的に 30～40 代女性の割合（いずれも 9 割以上）が圧倒的に高い。

＜コンテンツに対する評価＞

●満足度

※単位：人数(%)

満足度	生活習慣病 子ども期・高齢期	生活習慣病 成人期	炎症・感染症
とても満足	39 名（60）	35 名（54）	37 名（58）
満足	24 名（36）	25 名（39）	24 名（36）
どちらともいえない	1 名（2）	3 名（4）	1 名（2）
やや不満	0 名（0）	0 名（0）	0 名
不満	0 名（0）	0 名（0）	0 名
記入なし	1 名（2）	2 名（3）	3 名（4）
計	65 名（100）	65 名（100）	65 名（100）

コンテンツに対する評価は、3 冊ともに 9 割以上が満足しており、理解度についても、3 冊ともに 9 割以上の人が「理解が深まった」「初めて知ることがあった」「役立つ情報があった」と肯定的な回答をしている。

●理解度

※単位：人数（%） 複数回答あり

理 解 度	生活習慣病 子ども期・高齢期	生活習慣病 成人期	炎症・感染症
理解が深まった	36 名（40）	42 名（49）	40 名（45）
初めて知ることがあった	27 名（30）	20 名（24）	30 名（33）
知っていることが多かった	6 名（7）	6 名（7）	3 名（3）
役立つ情報があった	20 名（23）	17 名（20）	17 名（19）
記入なし	0 名（0）	0 名（0）	0 名（0）
計	89 名（100）	85 名（100）	90 名(100)

●改善点（全 3 冊）

※単位：人数（%） 複数回答あり

改 善 点	人数（%）	改 善 点	人数（%）
文字を大きくする	6 名（8）	イラストや図表・写真を増やす	18 名（24）
文章を短く簡潔にする	10 名（13）	文献情報を増やす	1 名（1）
文章量を減らす	5 名（7）	参照資料を増やす	3 名（4）
Q(クエスチョン)を増やす	2 名（3）	ターゲットをより明確にする	0 名（0）
Q(クエスチョン)を減らす	0 名（0）	冊子の規格(大きさ、頁数、紙質等)を変える	0 名（0）
Q(クエスチョン)のテーマを変える	0 名（0）	このままでよい	25 名（33）
専門用語を減らす	3 名（4）	その他	0 名（0）
構成(レイアウト)を変える	2 名（3）	回答なし	0 名（0）
計			75 名(100)

「冊子をさらに分かりやすく、読みやすくするにはどうすればよいか」という質問では、約 3 割の読者が「このままでよい（33%）」と現状を評価しているものの、「イラストや図表・写真を増やす（24%）」「文章を短く簡潔にする（13%）」「文字を大きくする（8%）」等、視覚的な要素を重視すべき点が指摘され、一般読者向けの改善点が明らかになった。また、Q（クエスチョン）のテーマの選択については一定の評価を得ているようだ。

●その他意見（一部抜粋）

・昨今はテレビやインターネットなどで情報がありすぎて、どれが本当に正しいかわからないことが多々ありました。今回のようにわかりやすくまとめてあり、また今後思いついたときにすぐ Q&A で調べられるのでとても助かります。家族の健康について改めて考える機会となり感謝申し上げます。

・知識を吸収するにはわかりやすくとても参考になると感じました。病気や症状に対して、受診のめやすや相談する科の紹介があると実用書に近い使い方もできるようになるのかなと感じました。

・今の時世もあり、炎症・感染症は特に興味深く読ませて頂きました。少し知っている情報がより詳

しく書かれていたり、知らなかった情報があったりと学ぶ機会をいただきありがとうございました。

・簡潔で端的でわかりやすく、徒に恐怖心をあおることなく正しい情報をご提供くださりありがとうございます。

・あいまいだった知識が整理され理解が深まりました。自分でも色々気を付けようと決心する契機となり、大変良い書籍だと思います。

・見やすく(読みやすく)、一問一答になっているので、何か困ったときにすぐパッと探して見えるのでいいなと思いました。また分冊になっているのが、より読みやすくて良いなと思いました。

・とてもきれいで見やすくまとまっていて参考資料も載せて頂いてるのでとてもよかったです。子どもから大人、そして両親のことも心配となる世代なので、おうちにあると安心な冊子を頂けてとても感謝しております。

・ポケットサイズでバックに入りやすく、あいた時間にちょっとずつ読める。紙も丈夫で折れにくい。文字が多くて教科書みたいな印象。感染症やアレルギーは特に今の時期興味を持てました。ありがとうございました。

・基本的な食生活や規則正しい生活を心がけていけば、健康でいられることや流行中のコロナウイルスについても詳しく書かれているので、大変参考になりました。本のサイズも小さく収納しやすいのでうれしいです。

【人間発達教育科学研究所：読者アンケート結果】

人間発達教育科学研究所では、Q&A シリーズ「発達障害(全 3 冊)」の配布先や資料請求(郵送希望)者に対し、読者アンケート(料金後納ハガキ)を行った。

●Q&A シリーズ「発達障害（全 3 冊)」読者アンケートハガキの評価結果

＜回答者プロフィール概要＞

※複数回答あり

性別	人数(%)
女性	34 名 (68)
男性	13 名 (26)
その他	1 名 (2)
記入なし	2 名 (4)
計	50 名 (100)

年代	人数(%)
10 代	0 名 (0)
20 代	2 名 (4)
30 代	7 名 (14)
40 代	12 名 (24)
50 代	14 名 (28)
60 代	11 名 (22)
70 代以上	1 名 (2)
その他	1 名 (2)
記入なし	2 名 (4)
計	50 名 (100)

所属/職業	人数(%)
お茶大(教職員)	1 名 (2)
お茶大(学生/院生)	1 名 (2)
他大学(教職員)	4 名 (7)
他大学(学生/院生)	2 名 (4)
保育士・幼稚園教諭等	3 名 (6)
小学校教員	3 名 (6)
中学校教員	0 名 (0)
高校教員	0 名 (0)
特別支援学校教員	0 名 (0)
その他教育機関の教職員	0 名 (0)
児童/生徒/学生(小/中/高/専門ほか)	0 名 (0)

女性(68%)が男性(26%)の 2.5 倍強と圧倒的に多い。30～60 代の現役世代が 9 割近くを占め、「児童・社会福祉関係(40%)」と「役所等、行政(15%)」が半数以上を占めている。これは、以下「情報源」のデータからもわかるように、研究所の寄贈・配布先からのアンケート返送が多いことに起因しており、PDF ダウンロード者の属性(医師や医療関係者)と大きく異なっている。

病院・医療関係	4 名 (7)
児童・社会福祉関係	22 名 (40)
役所等、行政	8 名 (15)
会社員	0 名 (0)
自営業	0 名 (0)
その他	5 名 (9)
回答なし	1 名 (2)
計	54 名(100)

●情報源

※複数回答あり

	Q&A シリーズ「発達障害」全 3 冊をどのようにお知りになりましたか？	人数(%)
1	機構/研究所からの寄贈	20 名 (36)
2	お茶大教員からの紹介・案内	10 名 (18)
3	ヒューマンライフイノベーション研究所からの紹介・案内	4 名 (7)
4	人間発達教育科学研究所からの紹介・案内	3 名 (6)
5	その他友人・知人からの紹介・案内	4 名 (7)
6	お茶の水女子大学 HP	0 名 (0)
7	ヒューマンライフイノベーション開発研究機構 HP	1 名 (2)
8	ヒューマンライフイノベーション研究所 HP	1 名 (2)
9	人間発達教育科学研究所 HP	3 名 (6)
10	学会等その他 HP	0 名 (0)
11	学会等その他メーリングリスト	3 名 (6)
12	その他	6 名 (10)
13	記入なし	0 名 (0)
	計	55 名 (100)

＜コンテンツに対する評価＞

「発達障害」3冊のコンテンツに対する評価は 96%の読者が満足しており、理解度についても、9 割以上の人が「理解が深まった(46%)」「役立つ情報があった(29%)」「初めて知ることがあった(18%)」と肯定的な回答をしている。「初めて知ることがあった」が相対的に低い(附属幼稚園アンケートでは 2 番め)のは、現職の専門家や関係者が多いためと予想される。

●満足度

満足度	人数(%)
とても満足	23 名 (46)
満足	25 名 (50)
どちらともいえない	0 名 (0)
やや不満	1 名 (2)
不満	0 名 (0)
記入なし	1 名 (2)
計	50 名 (100)

●理解度　※複数回答あり

理　解　度	人数(%)
理解が深まった	39 名 (46)
初めて知ることがあった	15 名 (18)
知っていることが多かった	6 名 (7)
役立つ情報があった	24 名 (29)
記入なし	0 名
計	84 名(100)

●改善点　※複数回答あり

改　善　点	人数(%)
文字を大きくする	5 名 (6)
文章を短く簡潔にする	10 名 (13)
文章量を減らす	5 名 (6)
Q(クエスチョン)を増やす	2 名 (2)
Q(クエスチョン)を減らす	0 名 (0)
Q(クエスチョン)のテーマを変える	0 名 (0)
専門用語を減らす	5 名 (6)
構成(レイアウト)を変える	2 名 (2)
イラストや図表・写真を増やす	22 名 (27)
文献情報を増やす	3 名 (4)
参照資料を増やす	3 名 (4)
ターゲットをより明確にする	4 名 (5)
冊子の規格(大きさ、頁数、紙質等)を変える	2 名 (2)
このままでよい	16 名 (21)
その他	2 名 (2)
回答なし	0 名 (0)
計	81 名(100)

「冊子をさらに分かりやすく、読みやすくするにはどうすればよいか」という質問では、約 2 割の読者が「このままでよい(21%)」と現状を評価しているものの、生活習慣病等の IHLI 冊子に比べ1割ほど現状評価が低い。また、「イラストや図表・写真を増やす(27%)」「文章を短く簡潔にする(13%)」はIHLI冊子と同様だが、文献情報や参照資料を増やし、ターゲットをより明確にする(合計 13%)等、専門家視点からのニーズも明らかになった。IHLI 冊子同様、Q のテーマの選択についても、一定の評価を得ているようだ。

●その他意見（一部抜粋）

・Q&A 形式がとても要点がまとまっていてわかりやすかったです。本人、家族、支援者が共通のツールで共有し理解できると思うので活用したい。ライフステージごとにポイントがわかり、また切れ目のない支援という視点でもよいと思いました。

・幼児期から高齢期まで生涯にわたり生活の場面で注意すべき点などが掲載されており、大変参

考になりました。療育を行う上での留意点や保護者様へのアプローチの仕方など参考にさせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

・Q が羅列的な印象をうけるので、テーマごとに分類して目次にまとまりがあると更に見やすくなると感じた。そうすると、自分に必要な情報にすぐアクセスできると思う。右上にあるものを目次にも。LD やチックの冊子では、基礎編が末尾にあるが、もっと主要なところにあってもよいのでは？と感じた。時々専門用語で説明があって知らないと理解できない。見開きで Q&A なのはとても見やすいです。冊子ごとに色もちがってきれいです。気分があがります。今後授業などで使いたいと思います。ありがとうございます。

・幼児期等の診断を受けて間もない子のお母さんお父さんへはよりわかりやすく見通しのもてるものとなると思います。

・文章表現がやや難しく、内容が理解しずらいところもあった。実践している現場の者としては、文章から想像してみることができた。内容としてはうまくまとまっており、今後の参考書類にさせてもらいたい。

・幼児期から高齢期まで網羅されているのが良い。Q&A 方式はわかりやすい。各コラムも興味深い内容だった。参考文献やウェブサイトが紹介されていて嬉しい。

・とても参考になりました。私自身にとっては、とても有益な量と内容でしたが、保護者や現場の先生方にとってはもう少し見やすく使い易くできるとよいかもしれません。ですが、ターゲットを絞りすぎるのもよくないかもしれないですね・・難しいところです。貴重な資料をありがとうございました。使用していきます。

・普段から疑問に思っていることの多くを実際の Q に見つけることができました。また、問いに対する解説は非常に明確に説明されていたので、多くの人の疑問（または不安）を解決できるのではないかと思いました。学齢期の対策が詳細に説明されており（ASD、ADHD は成人期も！）特に参考になりました。

・Q の内容がとても具体的で知りたいことをピンポイントで知ることができました。必要な Q を何度も読み返すことで、相談に来る本人、保護者にわかりやすい話ができます。Q&A シリーズを「うつ」「統合失調症」「不安障害」等にも拡げて頂ければうれしいです。

５．機構主催および学内連携イベント

（１）キックオフシンポジウム

【日時】2016 年 7 月 30 日（土）13:00～17:00

【場所】お茶の水女子大学　共通講義棟 2 号館 201 室

【主催】ヒューマンライフイノベーション開発研究機構

ヒューマンライフイノベーション研究所

人間発達教育科学研究所

【プログラム】

司会：入江優子研究協力課長

13:00～13:10　学長あいさつ（室伏きみ子学長）

13:10～13:20　祝辞（文部科学省大臣官房審議官　義本博司氏）

13:20～15:10　ヒューマンライフイノベーション研究所

① 研究所紹介　小林哲幸（教授：所長）

② 生理活性脂質・環状ホスファチジン酸による変 形性関節症治療薬の開発
後藤真里（特任准教授：脂質生化学）

③ 食因子による肥満関連疾患制御のための応用戦略
飯田薫子（准教授：生活習慣病学）

④ NAFLD/NASH 発症・進行過程における肝類洞壁細胞のクロストーク
石川朋子（特任准教授：栄養化学・機能形態学）

⑤ 微細藻類を用いたバイオ燃料生産の現状と課題
加藤美砂子（教授：植物生理学）

15:10～15:20　休憩

15:20～16:50　人間発達教育科学研究所

① 研究所紹介　菅原ますみ（教授：所長）

② 発達障害の子どもを持つ親のメンタルヘルスと支援
篁倫子（教授：発達臨床心理学）

③ 子ども・子育て支援新制度の意義と課題
～文京区立お茶の水女子大学こども園の挑戦～
宮里暁美（教授：保育学）

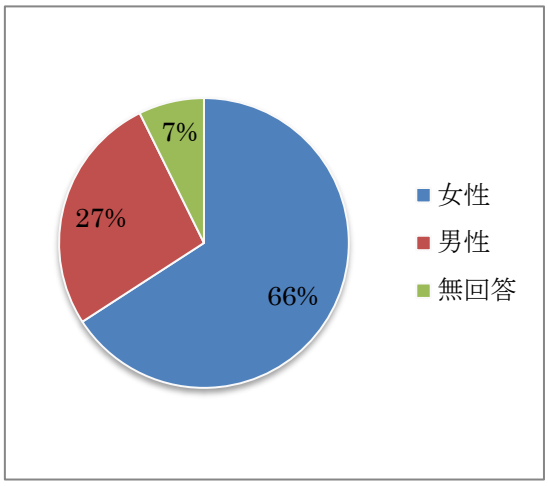
④ 研究員等スタッフ紹介

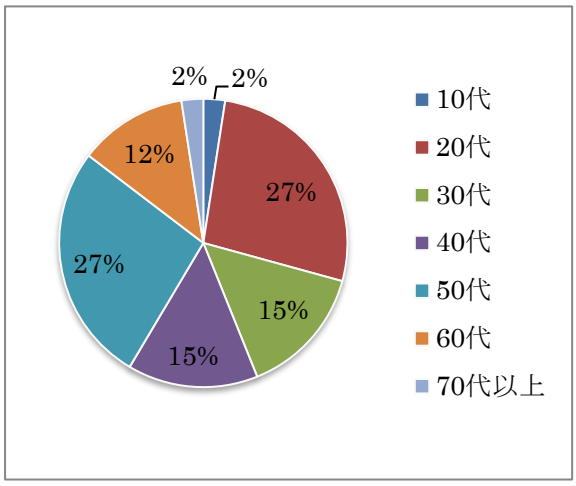
16:50～17:00　閉会あいさつ
小川温子（ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長、理事・副学長）

【参加者の声～アンケート結果】

本シンポジウムには、学内 66 名、学外 32 名、計 98 名の参加者があった。事後に行われたアンケートには41名（回収率42%）が回答し、シンポジウムの内容に関する満足度は、「満足」が63%、「やや満足」が 34%、「やや不満」が 2%、「不満足」が 0%だった。

参加者は女性が 6 割以上を占め、幅広い年代層が機構の研究や活動に関心を示している。





＜シンポジウムに対する意見・感想＞　　※順不同、原文のまま

・専門分野の研究発表ではないので、ヒューマンライフ研究所の内容はもっと一般的なもの（社会的背景など）を多くしたほうがよかったのではないか。“人の一生を通しての研究”にベクトルをそろえる意識を教員に強く持ってほしい。

・これからですね！

・多くの研究成果をうかがうことができて良かった。

・研究所のことが良くわかりました。大変興味深く、いつか私もお手伝いできたらと思いました。

・ヒューマンライフイノベーション研究所の内容が専門的で難しかった。

・組織の各活動方針が明確に宣言され、頼もしく感じました。少子高齢社会の課題へのアプローチ、よくわかりました。

・興味深い研究ばかりでとても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございます。

・1部のそれぞれの研究に興味と希望を感じました。保育園のこどもの中にはじっとしていられない、キーキー声を出す、注意されると怒る・・・そういう傾向が私どものアンケート調査でも見出されていますが、オメガ3との関連もあると知り、さもありなんと思った次第です。また、ペアレントトレーニングについては、園児の保護者にも必要と感じました。

・機構の目的に賛同いたします。より広い量的研究、より深い質的研究がなされ、より良い社会づくりに大きく反映されることを期待します。

・全体的に話がきけたので良かった。

・わかりやすい講演で大変良かったです。

・理系の医学的なものから、文系の保育の話まで幅広く、ヒューマンライフイノベーション機構の特

長がなんとなくつかめました。興味深く聴かせて頂きありがとうございました。変形性関節症、イソフラボン、肝疾患、バイオ燃料など、早く実現化してほしいと思いました。

・研究所の概容および興味深いさまざまな研究について知ることができ、学びについてさらに関心をもつことができました。ありがとうございました。

・人間発達教育科学研究所からの説明が特に興味深かったです。子どもの貧困、子どもと親のQOL を考える機会になりました。

・シンポジウムの目的（全体として伝えたいこと）がよくわからない。キックオフ後のボールの行方がわからない。

・研究成果の発信がとても大切なことであると思い、ぜひ進んでください。

・大変興味深く聞かせて頂きました。

・非常にわかりやすく期待できる研究が多かったです。

・各研究所が目指していること、2つの研究所の特徴がわかりました。

・cPA の講演がわかり易いお話しで良かった。大変上手な話し方でした。

・難しいことがたくさんありましたが勉強になりました。

・検討と食の関わりについて、このシンポジウムに参加してもっと学びたいと思いました。

・脂質と健康の関係をより具体的に研究されており感銘を受けました。もっと多くの事をお聞きしたいです。

・幅広い専門的な研究を紹介頂いて興味深かったです。

・2つの研究所が共同で行うプロジェクトが望まれるように感じました。今後そのような研究発表があれば、うかがいたいと思いました。

（２）文理融合学内科研　研究発表会
「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析」

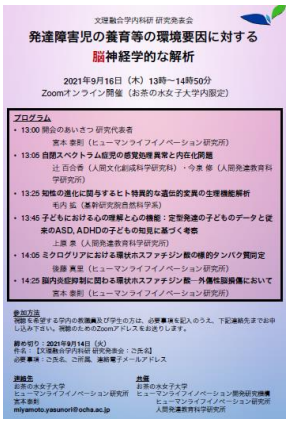
【日時】2021 年 9 月 16 日（木）13:00～14:50

【開催方法】Zoom オンライン開催（お茶の水女子大学内限定）

【主催】ヒューマンライフイノベーション開発研究機構

・ヒューマンライフイノベーション研究所

・人間発達教育科学研究所



【プログラム】

・ 13:00 開会のあいさつ 研究代表者

宮本 泰則（ヒューマンライフイノベーション研究所）

・ 13:05 自閉スペクトラム症児の感覚処理異常と内在化問題

辻 百合香（人間文化創成科学研究科）

今泉 修（人間発達教育科学研究所）

・ 13:25 知性の進化に関与するヒト特異的な遺伝的変異の生理機能解析

毛内 拡（基幹研究院自然科学系）

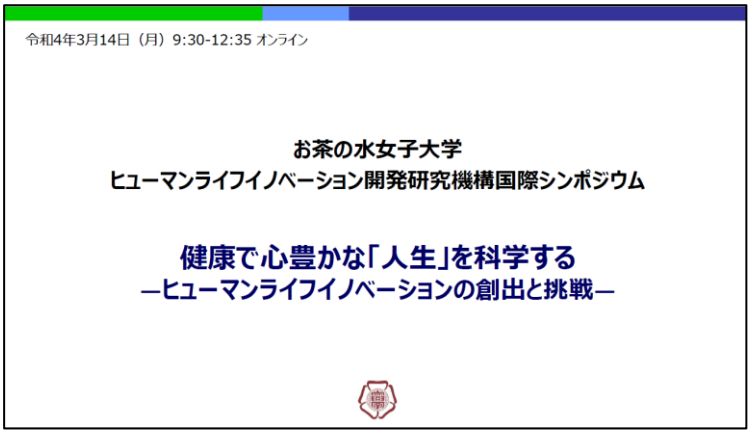
・13:45 子どもにおける心の理解と心の機能：定型発達の子どものデータと従来の ASD, ADHD の子どもの知見に基づく考察
上原 泉（人間発達教育科学研究所）
・14:05 ミクログリアにおける環状ホスファチジン酸の標的タンパク質同定
後藤 真里（ヒューマンライフイノベーション研究所）
・14:25 脳内炎症抑制に関わる環状ホスファチジン酸―外傷性脳損傷において
宮本 泰則（ヒューマンライフイノベーション研究所）

（３）ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構　国際シンポジウム
「健康で心豊かな「人生」を科学する～ヒューマンライフイノベーションの創出と挑戦～」

※本イベントは 2020 年 3 月 16 日に開催予定だったが、新型コロナウィルス感染拡大のため中止となり、2022 年 3 月 14 日にほぼ同じ内容で開催した。

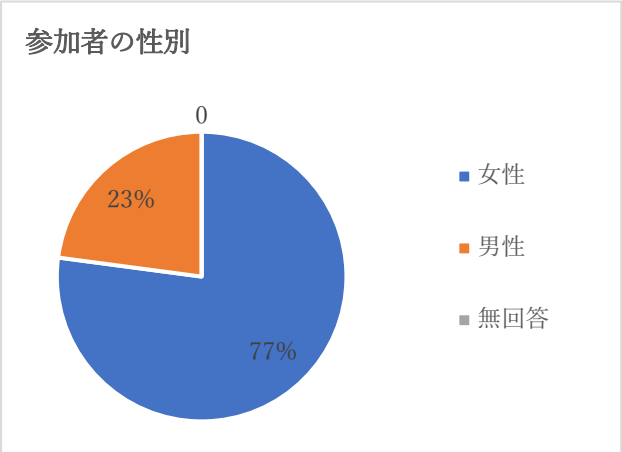
【日時】2022年3月14日（月）9:30～12:40
【場所】お茶の水女子大学（オンライン）
【主催】ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
・ヒューマンライフイノベーション研究所
・人間発達教育科学研究所
【プログラム】
9:30～9:35　　開会挨拶（学長　佐々木泰子）
9:35～9:45　　開催趣旨説明
（機構長、理事・副学長　石井　クンツ　昌子）
9:45～11:05　　基調講演
基調講演Ⅰ　楊　素卿　　台北医学大学教授
「台湾の少子高齢化社会における栄養研究のイノベーション」
基調講演Ⅱ　榊原　洋一　　お茶の水女子大学名誉教授
「子どもの自己肯定感とQOL」
（11:05～11:15休憩）
11:15～11:55　ヒューマンライフイノベーション研究所
飯田　薫子教授
「食品因子による転写制御と生活習慣病への応用」
後藤　真里特任准教授
「生理活性脂質・環状ホスファチジン酸とその誘導体の薬物動態及び生理活性」
11:55～12:35　　人間発達教育科学研究所

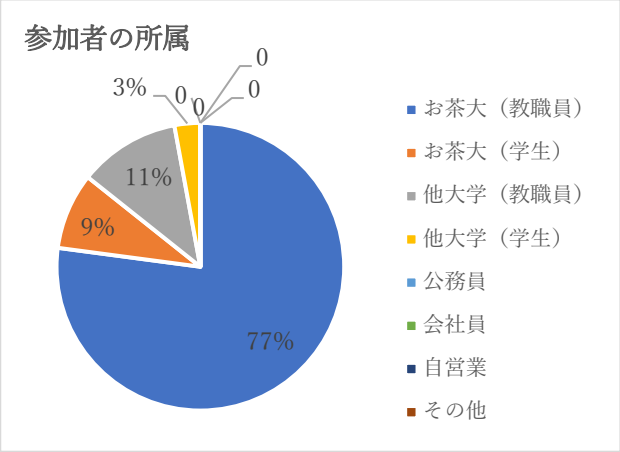
菅原　ますみ客員教授
「家族の健康とQOLに関する長期縦断研究
－子ども期の“しあわせ”をめぐってー」
浜野　隆教授
「学力格差を克服している学校・家庭の取組
－全国学力・学習状況調査の分析からー」
12:35 閉会の挨拶（機構長、理事・副学長　石井　クンツ　昌子）



【参加者の声～アンケート結果】

本シンポジウム後に調査したアンケートには 35 名から回答があった。基調講演の内容に対する満足度は、「満足」が 85.7%、「やや満足」が 14.3%、両研究所の研究報告に対する満足度は、「満足」91.4%、「やや満足」は 8.6%であった。





〈基調講演の内容に対する意見・感想〉
・子どもの自己肯定感について、興味深いお話をうかがうことができた。
・同じゴールを目指す医学，自然科学，人文社会科学のさまざまな研究のお話を伺うことができました。

・新しいことを知ることができた。
・とても質の高い研究の発表だった。
・普段聞く機会の無い、学内の先生方のご研究を聞け、面白かった。
・内容が興味深かった。
・ご登壇された先生方のご発表がとても充実した内容だった。
・幅広い視点からの話が聞けた。
・多様な分野の研究成果を伺うことができた。
・充実した内容でした。
・大変興味深い内容のお話でした。
・研究内容を非常にコンパクトにまとめていただき、理解しやすかった。
・日本語で聞ければさらによかったと思います。
・資料も視覚的に分かりやすかったから。
・英語講演については簡単な字幕または翻訳の資料があるとより分り易かったように思えます。
・わかりやすく、人生全般に示唆を与えうる要素のある内容であった。
・子供の自己肯定感と QOL の関係など、自分自身の今後の子育てなどにも活かせると感じた。
・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の意義が理解できる内容だった。

〈両研究所の研究報告の内容に対する意見・感想〉
・親の年収と子供の学力が相関していることを全国的に調査できたことは、大変貴重であると感じた。
・子どもの家庭環境や学力格差に関する研究をうかがうことができた。
・基礎的な研究から大規模調査まで，説得力のあるデータをお示しくださいました。
・基礎的な生物学的研究と人文系の研究の両方について両研究所の研究結果は興味深いものでした。
・新しいことを知ることができた。
・大変有意義な研究結果でした。
・皆の興味を引く、分かりやすいご講演でした。
・ハイレベル
・研究所で行われている内容が理解できた。
・ご登壇された先生方のご発表がとても充実した内容だった。
・専門的でむずかしく感じるところもありましたが、新しい分野の知見にも接することができ興味深かったです。
・充実した内容だった。
・自身の研究分野以外の内容を聞くことができた。
・内容が興味深かったです。
・健康においてパクチーを摂取することが良いと聞いて驚いた。
・それぞれの分野において、いずれも興味深く拝聴できました。分野が異なっても、生きていく上で

の人と社会という点で、目指すゴールは同じであることを再認識させられました。
・これまでの研究所の歩みと成果がよく伝わってきた。
・日本の教育制度について考えることができた。
・優れた研究内容であり、プレゼンテーションとしても分かり易かった。

〈国際シンポジウム対する意見・感想〉
・学会発表と異なり、異分野での交流シンポジウムと言うことで、幅広い視点からの内容について、興味深く感じました。このことより、今後の研究テーマや研究の方向性や目的、研究結果の社会的効用を考える上でも、大きな参考になるのではないかと感じました。
・さまざまな領域の最新の研究成果を伺えて実り多い時間でした。
・お一人の講演時間をもう少し長くして、実施してもよかった。
・今日は参加させていただきありがとうございました。次回は対面・参集で実施できることを願っております。
・研究所の発表についても質疑応答があるとよいと感じました。
・ご高名な先生方のお話を伺うことができ有意義な時間であったと思います。
・個人的には榊原先生のお話が興味深くいろいろと考えるところがありました。
・本日はこのような貴重な機会をいただきありがとうございました。教育や心理の分野はなじみがあった一方、栄養に関する分野はなじみがなく、理解が難しいと感じることもありましたが、お話をうかがうことができ、新鮮でした。ありがとうございました。
・登壇者の方々の相互の意見交換，質疑等のパネルディスカッションがあれば、これらの研究がさらに有機的につながり，面白かったであろうと思います（時間的に難しいことと思いますけれども。）
・英語・日本語両方でセミナーを聴くことが出来て良かったです。

（４）その他の学内連携イベント

【タイトル】 **グローバルリーダーとは― 今、そして 未来に向けて―**
【主催（連携共催）】 お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI） 人間発達教育科学研究所（IEHD）
グローバルリーダーシップ研究所（IGL） サイエンス＆エデュケーションセンター（SEC）
ライフワールド・ウオッチセンター（LWWC） 遺伝カウンセリングコース（GCC）
【開催日時】 2021 年 3 月 27 日（土）13:00～15:00
【参加形式】 Zoom ウェビナーによるオンライン配信（無料／定員 1000 名）
【プログラム】 ●基調講演「すべての女性の真摯な夢の実現に向けて」
室伏きみ子 お茶の水女子大学長
●鼎談「これからの女性のための高等教育と人材育成のあり方」
林伴子 内閣府男女共同参画局長

室伏きみ子 お茶の水女子大学長
佐々木泰子 お茶の水女子大学理事・副学長

【タイトル】 **日本健康心理学会準備委員会企画シンポジウム**
「食行動と心身の健康～心身医学・心理学・栄養学からのアプローチ～」
【主催(企画)】 日本健康心理学会大会準備委員会
【共催】お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション研究開発機構
【日時】2021 年 11 月 15 日～21 日(日本健康心理学会第 34 回大会)
【開催形式】 オンライン(動画配信)
司会者 大森 美香(お茶の水女子大学・東北大学)・赤松 利恵(お茶の水女子大学)
話題提供者 菊地 裕絵(国立研究開発法人 国立国際医療研究センター)
「食行動と健康～心身医学の立場から～」
話題提供者 山﨑 洋子(お茶の水女子大学)
「心理学の視点から～痩せ願望とメディア～」
話題提供者 河嵜 唯衣(お茶の水女子大学・ポツダム大学)
「栄養学の立場から～食行動に影響する“ﾏｲﾝﾄﾞﾌﾙｲｰﾃｨﾝｸﾞ”研究の動向～」
指定討論者 藤原 葉子(お茶の水女子大学)

【タイトル】 **生物＆HLI・EHD 研究所共催セミナー**
「父加齢の次世代の影響についてエピジェネティクスで理解する」
【主催】 お茶の水女子大学生物学科
【共催】 ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所
【日時】 2021 年 12 月 17 日(金)15:00～17:00
【対象】 学生・教職員・一般(参加費無料)
【開催方式】ハイブリッド開催 ①オンライン(Zoom Webinar)
②本校共通講義棟 2-201 での現地開催(本学関係者のみ)
【講演者】 大隅典子(東北大学大学院 医学系研究科 教授)

＜　資　料　編　＞

・資料①　国立大学法人お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構規則・・・・・ 1

・資料②　附属校園における「Q&A シリーズ」活用：
附属校園　教材・論文データベース公開情報・・・・・・・・ 4

・資料③　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
中間評価実施報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

・資料④　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
中間評価対応表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

・資料⑤　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
最終評価実施報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

資料①　国立大学法人お茶の水女子大学ﾋｭｰﾏﾝﾗｲﾌｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ開発研究機構規則

平成28年３月25日

制定

改正　平成29年３月31日

令和２年３月31日

令和３年３月25日

（趣旨）

第１条　この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学組織運営規則第６条の５第３項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（以下「研究機構」という。）に関し必要な事項を定める。

（目的）

第２条　研究機構は、国立大学法人お茶の水女子大学（以下「本学」という。）の教育研究理念に基づき、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、本学のこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行うことを目的とする。

（業務）

第３条　研究機構は、前条の目的を達成するため、次に掲げる業務を行う。

(1)　心身の健康と生活環境の向上に資するイノベーションの創出に関すること。

(2)　人間発達科学分野における教育研究に関すること。

(3)　ヒューマンライフイノベーション研究所及び人間発達教育科学研究所の管理運営に関すること。

(4)　その他前条の目的を達成するために必要な業務

（研究機構に置く組織）

第４条　研究機構にヒューマンライフイノベーション研究所及び人間発達教育科学研究所を置く。

２　前項の研究所に関し必要な事項は、別に定める。

（組織）

第５条　研究機構は、次に掲げる者をもって組織する。

(1)　研究機構長

(2)　産学連携を担当する副学長

(3)　ヒューマンライフイノベーション研究所に所属する職員

(4)　人間発達教育科学研究所に所属する職員

(5)　その他学長が必要と認めた職員

（研究機構長）

第６条　研究機構長は、研究を担当する副学長をもって充てる。

２　研究機構長は、研究機構の業務を掌理する。

（研究機構会議）

第７条　研究機構に、研究機構の運営及び業務に関する事項を審議するため、研究機構会議を置く。

２　研究機構会議は、次に掲げる者をもって組織する。

(1)　研究機構長

(2)　産学連携を担当する副学長

(3)　ヒューマンライフイノベーション研究所長

(4)　人間発達教育科学研究所長

(5)　その他研究機構長が必要と認めた者

３　研究機構会議の議長は研究機構長をもって充て、議長は研究機構会議を主宰する。

４　研究機構会議の構成員は、第２条の目的を達成する上で必要な事項について、研究機構会議での審議を求めることができる。

５　研究機構長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

６　本条に定めるもののほか、研究機構会議に関し必要な事項は、別に定める。

（基幹研究院等との連携）

第８条　研究機構は、第３条に定める業務を遂行するに当たっては、基幹研究院、グローバル女性リーダー育成研究機構及び学内共同教育研究施設との密接な連携のもとに行うものとする。

（事務）

第９条　研究機構の事務は、研究・産学連携課が行う。

（雑則）

第10条　この規則に定めるもののほか、研究機構に関し必要な事項は、別に定め

る。

附　則

この規則は、平成28年４月１日から施行する。

附　則（平成29年３月31日）

この規則は、平成29年４月１日から施行する。

附　則（令和２年３月31日）

この規則は、令和２年４月１日から施行する。

附　則（令和３年３月25日）

この規則は、令和３年４月１日から施行する。

資料②　　附属校園における「Q&A シリーズ」活用：附属校園　教材・論文データベース公開情報

実践授業タイトル	【教科：単元】キーワード	校種・学年	概　　要	使用した Q&A 冊子
縄文と弥生、生きるならどちらが幸せ	【社会・地理歴史・公民】	小学校・小６	筆者（授業者）の経験から，「食」を「判断の規準」にして「縄文と弥生，生きるならどちらが幸せか」という学習をおこなった場合，子どもたちの多くが「弥生時代の方が幸せ」と考えてきた。その理由の多くは「米は保存ができるので，採集や狩猟に依存する縄文時代よりは飢えないですむ」ということだった。反面「縄文時代は結構グルメ食」など，現代人から見て思ったよりも良い物を食べているという意外性を突く考えも出されてきた。そこで，栄養のバランスという視点が入ると縄文時代の食の方が幸せという傾向はどのようになるのか試行する学習を行いたかったのである。 【Q ＆ A シリーズ 『生活習慣病 成人期』活用事例】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/809	Q&A シリーズ「生活習慣病－成人期－」p.37 「図 エネルギー産生栄養素バランス」
病気の予防～感染症の歴史から学ぼう～	【社会・地理歴史・公民、体育・保健体育、情報、総合的な学習・探究の時間、道徳】 接続 探究力・活用力 社会情動的スキル てつがく	小学校・小６	新型コロナウイルス（以下、コロナと略す）は、私たちの暮らしや生き方そのものにも大きな影響を与え、感染症の恐ろしさを改めて思い知らせた。感染症はどうして怖いのか。それは、感染症のことを知らないからであり、人は知らないことに関して恐怖を覚える。その恐怖が人々を間違った行動に走らせたり、差別や偏見を生んだりするのである。感染症は、「病気」そのものの感染だけではなく、「不安」や「差別」といった心のあり様も感染し、弱者や同調しない人たちを追い詰め、病気はさらに広がっていく。このことは、世界で感染症が起こるたびに社会が崩壊し、分断してきた歴史がまさに今、くり返されているといえる。 未だ先行きの見えない状況の中、コロナと共に生きている子どもたちであるが、歴史の中でくり返されてきた感染症から学べることがあるのではないだろうかと考えた。そこで、天然痘やペスト、スペイン風邪などと同様に、人類の歴史と共にあった結核に焦点をあてることにした。結核は、我が国では１年間に約 14,000 人の新しい患者が発生し、約 2,000 人が命を落としている感染症であり、決して過去の病気ではない。また、学校感染症にも位置づけられ、定期健康診断の項目でもあることや、乳児期に受けた注射痕がまだ体に残っている子どもも多い。 本学習で結核の歴史について知ることを通して、コロナと共存するために自分たちに何ができるのか考え、コロナが収束して新たな感染症が出現したときにも、不安に負けず、正しい知識と理解に基づいた冷静な行動ができる人になってほしい。さらに、一市民として集団や社会全体の健康へと考えていくための素地を涵養できるように、対話を通して育みたいと考え、授業づくりを行い取り組んだ。	Q&A シリーズ「炎症・感染症」 p.52（Q23）、p.56（Q25） p.74（Q34）、p.78（Q36） p.80（Q37）、p.84　（Q39） p.92（Q43）、p.94　（Q44） p.96（Q45）

資料②　　附属校園における「Q&A シリーズ」活用：附属校園　教材・論文データベース公開情報

			【第６学年（体育科保健領域）　「病気の予防～感染症の歴史から学ぼう～」】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/818	
生活習慣病に関する保健指導を実践しよう	【体育・保健体育】 探究力・活用力 自主研究	中学校・中３	知識伝達型の授業に陥りやすい保健分野の授業において、生徒が必要感をもって学びに参加し、その学びの成果を主体的に表現する授業を構想することとした。また、保健分野の内容は、生徒の実生活に生かされることが重要である。したがって、学びが学校の中での知識の習得として完結するのではなく、実際の生活と密接に関連するような仕掛けを学習に組み込んでいくことが求められる。 　本実践では、保健分野の生活習慣病に関する単元で、知識構成型ジグソー法を活用した授業を構想した。単元のテーマを『保健師になって生活習慣病に関する保健指導を実践しよう』と設定し、生活習慣病について学習した内容をもとに、家族に対して実際に保健指導プレゼンテーションを実践する課題を設定した。保健指導を行うためには、生活習慣病に関する内容について深く、広く学ぶ必要がある。そこで、本実践では、生活習慣病に関する四つのトピックを設定し、ジグソー学習の方式を採用して、トピックの分担をしながら深めロイロノートにまとめ、その学びをチームで共有し、チームで一つのスライドプレゼンテーションを作成することとした。チームのメンバーのそれぞれが、各トピックに関するエキスパートとなり、その学びをチーム内で共有する学習方略を採用することで、主体的・協働的に学習を展開できるようにした。 【保健ジグソー学習単元計画：生活習慣病などの予防】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/815	Q&A シリーズ「生活習慣病 子ども期・成人期」 ●「生活習慣病・がん」 ⇒子ども期 Q1,2,3,4,6,11 　成人期　Q2,6,14 ●「食事」 ⇒子ども期 Q21,22,23,25,27 　成人期 Q14,15,16,25,26 ●「運動」 ⇒子ども期、成人期 　Q12,15,18,19 ●「睡眠」 ⇒子ども期、成人期 Q13,18
自他の健康に根ざすがん教育	【理科、体育・保健体育、総合的な学習・探究の時間】 探究力・活用力 　ICT（情報通信技術） SSH（スーパーサイエンスハイスクール）	高校・高１	高等学校では 2022 年度の新学習指導要領の施行に伴い、これまで「生活習慣病」の単元の中で学習していたがんが独立した単元となり、より詳細に、より深く取り扱われることとなる。がん教育の施行的・先進的な取り組みとして、①がんへの正しい理解 ②がん予防 ③がん患者との共生 の 3 つをテーマに、実生活に活かすとともに自他の健康に意識が向くような実践を模索した。 具体的には、授業者の作成した学習プリントや発問により、単なる知識・理解のみではなく、個人や複数人で考える場面を取り入れ、がんに対する関心を高めたり、データからわかることを読み取ったりする工夫を施した。また、Q&A シリーズの副読本を活用し、教科書や図説にない情報や資料を加えたり、補足したりすることで様々な切り口からがんについて考える機会を設けた。さらに、ICT 機器を活用しがんに対する疑問点や課題を明確にしつつ、自身でどんな取り組みができるか思考することでヘルスリテラシーの向	Q&A シリーズ「生活習慣病 ー成人期ー」 　P.6、P.8、P.26、P.44、P.58

			上を期待した。 【実践報告・授業案】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/806 【がん教育 2021 特別授業ワークシート＆アンケート調査】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/rinfo_pdf/117	
加齢と健康より「骨のはなし」	【体育・保健体育】	高校・高２	保健室で、体重計に乗っては一喜一憂する生徒の姿や見た目を気にするあまり生きづらさを感じている生徒に出会うことがある。日本で根強い"ルッキズム"としての誤ったボディイメージやジェンダーバイアスがもたらす影響は大きい。そこで、身長と体重のバランスや運動負荷と骨密度の関係について、正しい知識を習得するとともに、人生 100 年時代と言われる中で、健康寿命を延ばすために「今」何が大切で、必要かを考える授業の教材として、「骨密度」に注目した。また、女性のライフステージの各段階における健康課題について、見通しを立てて考えることにも注視したいと考えた。 【授業案　加齢と健康より「骨のはなし」】 https://kyozai-db.fz.ocha.ac.jp/downloadpdfdisp/811	Q&A シリーズ「生活習慣病ー成人期ー」P.60-61 ・「生活習慣病ー子ども期 高齢期ー」P.30-31 ・「生活習慣病ー子ども期 高齢期ー」P.42-43

資料③　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
中間評価実施報告書

１　はじめに

お茶の水女子大学では、第 3 期中期目標期間（2016 年度～2021 年度）における基本的な目標のひとつとして、「本学の特色ある研究を活発に推進し、研究レベルの高度化と先進的な研究分野を開拓して学術と社会に貢献するために、新たな研究組織を構築し、国際的な研究拠点を形成する。第３期中期目標期間には、特に、人の発達過程における様々な課題を解決するための研究と、人が一生を通じて心身ともに健やかに暮らすための研究を推進し、その成果を社会に向けて発信する。」が掲げられ、これに基づく、中期計画及び各年度計画を策定することとなった。これにより、2016 年 4 月に「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」が直ちに設置された。

本機構の下に、「ヒューマンライフイノベーション研究所」と「人間発達教育科学研究所」を設置し、それぞれ本学の強みを活かして、生命科学・生活科学による身体的・環境的側面ならびに人間発達科学・教育科学による精神的・社会的側面から、国内外の研究機関や企業と連携することによって、「からだ」と「こころ」の両面からの研究を推進する。また、幼児期から高齢期までの人の発達段階に即して、人が健康で心豊かに過ごし生活環境を向上させる革新的解決方策を創出し、その成果を社会に向け発信することを目標とすることとした。

2019 年度においては、これらの目標を達成するための計画として、今までの成果等の検証を行うため、その中間評価の結果をとりまとめることとした。

今回の中間評価に際しては、評価委員会の開催や現時点の成果に関するシンポジウムの開催を予定したが、新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大により、中間報告書（別添参照）に基づき各委員に書面にて評価をいただく形に急遽変更することとなった。

各委員の先生方におかれては、たいへんお忙しい中協力いただき、この場を借りて感謝申し上げたい。

今回の中間評価により第 3 期中期目標・計画を達成することはもとより、「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」が自他共に認める国際研究拠点として更に発展するためにも、今回の評価結果を踏まえた改善への取組を図ることが重要であることはいうまでもない。

２　評価の方法等

中間評価の実施に当たっては、本学の評価を担当する副学長（産学連携を担当する副学長も兼務）のもと、５名の外部委員を含む合計９名の委員会構成員により、あらかじめ送付された中間報告書による書面評価により行われた。

中間報告書は、機構及び各研究所の概要、構成などの資料に加え、2016 年 4 月から 2019 年 10 月までの各研究所の研究業績、シンポジウム等の活動実績等の 300 ページを超える資料を各委員によりご確認いただき、１）機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価、２）国際的教育研究拠点形成に関しての意見、提言、３）今後の課題についての提言、４）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の４つの観点でのコメントにより評価をいただいた。

３　評価委員からのコメント概要

各評価委員からは概ね、中間評価段階での活動実績については肯定的なコメントをいただいた。

また、さまざまな視点からの指摘や提言をいただいた。

各評価委員から寄せられたコメントの概要は以下のとおり。

１）機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価

・研究業績や研究活動の豊かさ、国際性、研究活性化の取り組み、異分野連携による効果、附属学校等との連携、効果的な発信の６つの観点に注目し、引き続きそれぞれの観点での取り組みが期待される。
・お茶の水女子大学だからこそ追求、実現できる QOL の定義と将来像が示されるとよい。イノベーションをテコに、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」のようなより高い境地を目指してもよいのでは。進捗に関しては、年々組織が充実し、いい論文がふえてきている。
・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(OHLI)主催の年次シンポジウムは、来場者から多くの肯定的で示唆的なコメントが寄せられ、好評。
・年次シンポジウムの開催は、各研究所の研究成果を一般に公開するための OHLI にとってたいへん有意義なイベント。 2018 年と 2019 年途中までのヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育科学研究所（IEHD）の教員による研究業績は生産的なものであった。英語での論文は IHLI が 83 編、IEHD が 28 編出されており、これらの論文の中で、IHLI と IEHD がそれぞれ発表した 13 編と 28 編の論文は神経科学関連の研究だが、神経科学の研究領域では IHLI と IEHD の間の教員間のコラボレーショントピックとなる可能性がある。 神経科学関連の研究のうちいくつかの論文は、インパクトの高いジャーナルに掲載されており評価できる。
・IHLI では、テーマとして、生活習慣病、炎症性疾患、発　達障害を中心に展開されているが、特に研究報告は生命科学部門、食物栄養部門などが活発に行われており、いずれも優れた研究論文の報告がみられるが、中でも「大規模画像解析による脳浮腫の定量化技術の開発と環状ホスファチジン酸の効果」や、論文「食品のおいしさと健康と安全性の先進的研究体制の確立に向けて」などは今後の発展が期待される。公開シンポも活発に行われ、食生活からうつ病の治療を指向する更なる研究はその成果が期待される。
・両研究所はコラボレーションを考えており、それぞれのテーマに対する総合的アプローチが伺える。さらに研究体制として様々なライフステージにおける“こころ”と“からだ”に関する国際レベルの研究をより充実させることを目指しており、アクティブな研究活動がなされ、成果を生み出している。その機構の目的に沿った取組が順調に行われていると判断される。
・成果物であるライフステージ別 Q&A シリーズは、研究成果の社会への発信のみならず、研究成果を広く役立ててもらえることから、機構の社会貢献活動としても評価できる。
・2016 年に機構が設置されたのち、中期計画通り、IHLI と IEHD が新設されています。IHLI は、I 期では 2 部門から 3 部門に、II 期では 6 部門に拡張され、メンバーも 10 名から 28 名（うち 16 名が女性）へと増加しており、シンポジウム概要、プロジェクト報告、研究業績からは、広い領域において、多様な現代的課題に関し、世界水準の研究成果が蓄積している。IEHD も、3 部門における 43 名のメンバー（うち 34 名が女性）がライフコースに沿った多様かつ世界水準の研究が行われており、本機構が「人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点」としての基盤を構築し、成果を蓄積し、広く国内外に発信していること、機構メンバーの女性比率からも女性研究者・リーダーの育成が着実に行われている。全体として，本研究機構と二つの研究所の進捗状況は良好であり，中間目標はたいへんよく達成されている。
・機構全体のシンポジウム開催など公開活動、具体的なテーマのもと多数のメンバーで実質的な研究が展開されていること、年度末成果報告会の実施、個別のシンポジウム，セミナー，イベントなど多彩な活動を行ってきていることなど全体的な進捗状況は 4 年経過後の中間評価として適切と評価。
・研究活性化の取り組みに関しては、他の部局や全学的な管理業務とのエフォートの調整など、研究活動に集中できる労務上の取り組みも考えられる。

・効果的な発信に関しては、報告会については、その趣旨や目的がやや分かりにくいとの指摘があることから更なる工夫や取り組みの充実が期待される。
・「これまでにない方法（イノベーションを実現する)」については、この 3 年半の経過では、まだその成果は見られていない。「人の年代ごとに（人間の発達段階に即した)」に関しては、個々の研究の対象は幼児、青年、成人、高齢者と各年代を含んでいるものの、研究内容がそれぞれ異なるため、それらが統合されたとしても、各年代に適合した健康と生活環境の向上のための方法にまとめられるとは思われないことから、この課題については、目的に沿った取組が行われていないと判断せざるを得ない。
・IHLI では、開設当初の 2 部門から、平成 30 年度より 6 部門に拡大・改組し、27 名の学内研究員を配置して活発に研究活動を展開している。平成 28 年 4 月～令和元年 10 月までの学術論文数は、計 161 本（うち英文論文が 73.9%）で、1 名あたり約 6 本と高い水準を示している。こうした研究成果をもとに開催された各年度計 3 回の市民向けの公開講座には多くの企業関係者を含め計 391 名の参加を得ており、8 回開催された共催・後援イベントの開催とともに、社会発信においても順調な活動を展開している。
・IEHD では、3 部門に、21 名の学内研究員を配置し、附属学校園関連の 9 名の連携研究員とともに、大学内にあるナーサリー・こども園・幼稚園・小中高校・大学・大学院を繋いだ学術的および実践的な発達教育研究を展開している。本研究所は、お茶の水女子大学が開学以来、伝統的に重視してきた子ども研究を継承発展させ、IHLI とともに、文理融合的視点から生涯にわたる心身の発達の解明とその保育・教育的応用に視点を拡大しようとしている点は、少子・高齢化が進展する我が国において時宜を得たものであると評価できる。平成 28 年 4 月～令和元年 10 月までの学術論文数は計 173 本（うち英文論文が 25.4%）・著書 91 件で、総じて順調に研究活動が実施されてきている。各年度末の成果報告会を含め主催したシンポジウム・セミナーは 11 回に及び、共催・後援イベントは 37 件と活発である。これらのうち 17 件は中国やスリランカ、フィリピン、アメリカ、ドイツ、フィンランド、イギリス等幅広い国々からゲストを迎えたセミナー・シンポジウム・研究会であり、総合的・国際的な教育研究活動の展開をめざす本機構のミッションに沿ったものである。

２）国際的教育研究拠点形成に関しての意見、提言

・プロパー教員・研究員の研究遂行・論文作成上枢要な役割を果たしたと評価される活動にかぎってみると、IEHD では、スリランカの思春期児童を対象とした study を報じた Omori, Yamazaki, Aizawa 論文（2017 年）ほか２編など、IHLI では、Tajima, Yanoshita, Enomoto, Saito, Iida 論文ほか２１編などが国際水準にあることより評価できる。
・両研究所とも、多数の英文論文で成果を国際的に発表していることは評価できる。また、両研究所を合わせて、2016 年度以降で科研費の研究代表者となっている専任教員が 28 名いることは、学術界において評価されていることを示すもので、研究力を示すものと評価できる。これらのことから、国際的研究拠点としての活動は行われているものと評価される。
・国際的教育研究拠点としての達成度は、国際共同研究や国際発信、外国研究者や留学生の受け入れや国際交流、グローバルな視点での研究内容等により推定できるものと思われるが、中間報告書の研究業績から、両研究所ともに，国外研究者との共同研究、国際誌や国際シンポジウムでの発信等が積極的に行われており、世界水準の研究活動が進展していることが確認できた。また、研究内容も、グローバルかつ喫緊の課題とともに「茶，米，納豆」などの日本を意識した研究や、 OECD、欧米、アフリカ、東南アジアを対象とする、国際的視座をもつ多様な研究が多数行われており、国際的教育研究拠点としての地盤が固まりつつある。以上より、本機構の「国際的な教育研究活動」や「海外機関と連携した世界水準の国際拠点」の構築についても良好な達成水準にある。
・ヒューマンライフイノベーション研究所では多数の構成員のもと、多くの研究論文が国際誌に掲載されており高く評価できる。国際学会発表や招待講演の状況も同様。今後も一層活発に進めることが望まれる。IEHD についても国際的な研究活動に関しては前述と同様。

加えて、多彩な国際的活動（海外訪問団受け入れ２件、国際シンポジウム／セミナー７回）は高く評価できる。以上のことから国際的な教育研究拠点が形成されつつあると判断できる。

・国際化という視点では学会参加、シンポジウム開催などによる交流は見られているが、さらに進んで両国の学生間のある一定の期間の直接交流（海外へ、海外から）、文化融合の交流も必要であり、それらの研究成果が多角的に示されるべき。“文化融合”とは具体的にどのようなことを指しているかを述べた方がわかりやすい。
・国際的教育研究拠点として確たる評価を得るためには、当機構の研究実績や活動を充実させていくことはもちろん、海外の他機関などに対して当機構に注目させる働きかけを行っていくことなども有用。
・機構の IHLI と IEHD どちらの研究所もバイオサイエンス分野の研究に属しているそれぞれ大学院生の２つの学習指向グループがあるが、IHLI は実験系研究指向、IEHD は非実験系研究指向。この２つのグループの学生に対して、学際的な研究(例えば、基礎人工知能、脳科学など)の実施をすることが可能。学際的な教育研究により、大学院生が研究範囲を広げるのに役立つ可能性がある。
・国際化拠点形成を通じて何を求めているのかを具体的に述べることが必要。
・海外の当該分野の発達しているところを分析して吸収するとしたら、ぜひ日本人と海外との密なる交流（学生レベルでも教員レベルでも）が必要。日本と海外をミックスした教育システムプログラムを創り、物的、人的国際交流を図るべきで、例えば、お茶大キャンパスの機能を海外の大学内キャンパスに設置し教育研究する場を設定する一方、お茶大のキャンパスに海外大学のキャンパスを作るなどが考えられる。現在交流のある大学がお茶大キャンパスに交流拠点を作ることもひとつの案。交流を通じて日本の文化、研究をどのようにして世界に伝えて理解を進めていくかというための具体的な方法が求められる。
・海外の研究者と連携した共同研究を計画、実施できれば、国際的研究拠点としての評価はさらに高くなると思われる。
・教育拠点に関しては、公開シンポジウム等の活動は見られるものの、人材育成にまで至っているかは、報告書に記載がなく不明。なお、大学院生が機構に属する教員から研究指導を受けていることもあるのではないかと思われ、留学生を含む大学院生が機構内の研究に関与している状況が示されるならば、国際的教育拠点としての活動をある程度示すことができるのではないか。
・機構全体として企画された国際シンポジウム（2020 年 3 月：中止）については、良い機会なので予定された内容を資料（日・英）などに纏められウェブ上で公開されることが望ましい。
・両研究所ともに各研究員のレベルでは海外研究者との共著論文が公刊されており、IEHD では国際シンポジウム・セミナー等も活発に実施されていることから、国際的な拠点形成に向けた一定の進捗はなされている。しかし、組織レベル（各研究所あるいは機構全体）での海外との教育・研究の交流は今後の課題であり、“生涯にわたるこころとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする海外の大学や研究機構との連携を図っていくことが必要。

３）今後の課題についての提言

・最終評価においては、取り組みの継続や充実により、更なる成果が上がっていることが望まれる。
・お茶の水女子大学は生命・生活・教育科学の分野で、他に類を見ない教育研究の実績とポテンシャルを持っており、研究所・部門・分野それぞれの持ち味と強みを活かした機構内外の協同研究のさらなる推進によって、お茶の水女子大学ならではのプラスアルファが香るイノベーションを生み出してほしい。Anxiety 様行動の成因や BBB breakdown 制御に関する生化・代謝部門の研究、その成果が Clin Nutr ほかであらわれてきている栄養科学部門の横断研究、人間発達基礎・保育教育実践研究部門の国境を超えた調査研究など、今後

の発展が注目される。貴機構全体として、世代を超え、歴史に残る将来を見据えた研究（prospective study）の推進も期待したい。

・日本における高齢化に伴い、栄養医学や老人栄養などの研究分野が重要になってきたことにより、IHLI の栄養科学部門・食品科学部門・代謝部門の統合プログラムが形成されると良い。例えば、この統合プログラムは、心血管疾患と非アルコール性脂肪肝炎（NASH）に関する研究に焦点を当てたものなどもよいのではないか。 さらに、IHLI における基礎的な脳科学研究の出版物 と IEHD で開発中の子供の認知研究はたいへん生産的で印象的。

・この 2 つの研究所間には、まだギャップがあるように感じる。 外部からの脳機能イメージング研究チーム(例えば fMRI、EEG など)を含めた取り組みを行うことなどにより、将来的に異なる精神および神経疾患の研究において IHLI と IEHD の間のより多くの共同研究が促進されると考えられる。

・現在の活発な活動を更に続けていくことが望まれる。

・今後、必要となることは、2 つの研究所の成果を機構の目的に沿って統合していく活動と思われる。そうした活動には、①機構の目的全体を具現化した総合的な成果としてまとめる方向と、②特定のテーマに特化して深化した成果を出す方向の 2 つがあるとよい。機構としては、前者は必須の活動であるが、後者はオプション的な活動。

・2 つの研究所の研究教育活動については、両者が有機的に結びついた研究教育活動が見られていない。両研究所のパンフレットでは、全く同じ目標（健やかな育ち・活力ある暮らし・元気な老い）が記載されていることから、両者が連携した活動がひとつも示されていないことには違和感がある。公開シンポジウム参加者の感想でも、研究成果を評価する声がある一方で、機構全体としてのまとまりが感じられないとする意見も見られている。2 つの研究所のこれまでの研究活動を概観すると、例えば、「食」と「生活習慣病」をキーワードに連携した教育研究活動を行える可能性があるように思われる。生活習慣病に関連する主な要因として、食事、運動、睡眠、ストレス、喫煙・飲酒などがあげられているが、これら要因の中で食事・食品に関しては、両研究所で研究実績があり、それらを融合させた研究教育活動を検討してみるのはどうか。食の要素を中心とした生活習慣病への対応とその科学的根拠を、幼児期から老年期までの発達段階ごとに整理しまとめあげるならば、個々の研究者の活動ではなく、機構の成果として評価されるのではないか。

・研究成果の社会への発信媒体として、この Q&A シリーズの定期的発行を計画していることは評価できるが、各シリーズの年代の区分で子どもの次がすぐに成人期となっていることには少し無理があるように感じられる。「青年期」を入れることを検討いただきたい。

・「人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション」という目標に照らせば、シンポジウムなどに見られる分野間連携をさらに進め、各研究分野のより踏み込んだ交流や融合的な研究、例えば、IHLI の 6 部門間の共同研究や、IEHD における実践・基礎・臨床の横断的研究の活性化に期待が募る。ディシプリンの異なる研究分野の共同は常に困難を伴うが、すでに達成されている機構の融合的な交流はそれを可能にし、拠点のさらなる展開をもたらす。大学院生、学部生を積極的に巻き込むことで、広い視野をもつ次世代リーダーを育成することができ、機構の教育拠点としての機能も強化できる。

・「海外機関と連携した世界水準の国際拠点」という目標に照らせば、本研究機構のメンバーに外国人研究者やポスドク、大学院生を迎え入れ、また、諸国の同じ目的をもつ研究機関との研究交流をさらに活性化することが期待される。こういった活動は、お茶の水女子大学の大学協定・交流（Overview 2019-20 より）ですでに行われていると思われるが、本機構独自の活動としても推進することで、「世界水準の国際教育研究拠点」としての位置づけが強化される。

・本機構の目的の達成度を測定する上で、いくつかの指標を追加してもよい。中間報告書からも本研究機構の研究教育活動、女性リーダーの育成、世界水準の国際拠点等の達成度は読み取れるが、加えて研究者のジェンダー比率を年齢や職位別にカウントする、学生の業績も明記する、外国人メンバー、外国人研究者・ポスドク・院生等の受け入れに関する資料等も提示する等により、より一層、多側面からの評価が可能になる。

・多数のシンポジウムは面白く魅力的であり、参加者にもたいへん好評でしたが、参加者の約 7 割は女性であり、学生、大学職員が多いことから、学外への発信が十分に行われてい

ない可能性がある。たいへんもったいないことですので、さらなる発信（場合によっては動画配信等）も行われるとよい。
・機構全体、IHLI、IEHD、いずれも4年経過した現在、国内外において、順調に、目的に沿った成果を挙げ発展していると判断できる。今後も同様のペースで進めて頂ければ。
・イノベーションの語は新しいものを創ることに留まらない。社会への普及をもって完遂することを考えれば、今後、これらの研究成果をベースに、（人材育成を含めた）社会普及への様々な道筋（つまるところ（これまで関心のなかった）世間の耳目を集め、非アカデミアからの資金流入）を探ることも意義がある。
・今後、本機構での先端的な研究や啓発活動を、学生・生徒の教育にどのように活かしていくかが課題。ワンキャンパスにナーサリー・こども園・幼稚園・小中高校・大学・大学院が同居している利点を活かし、児童・生徒・学生とその家族、教職員を対象とした幅広い生涯教育拠点としての活動を開発し、展開していくことを期待したい。
・“生涯にわたるこころとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする国内の大学や研究機構、民間企業との連携について、組織レベル（研究所・機構全体）での定常的な交流や共同研究の実施が図られていくことが望まれる。その際には、メンバー個々の研究や研究所内のプロジェクト研究、また両研究所が協働して実施している研究（「女子青年における食生活と心身の健康に関する縦断研究」）の成果を精査・整理し、発展性のあるテーマを抽出したうえで、外部との連携を推進していくことが望まれる。

4）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

・当機構内部における自己評価やそれを踏まえた今後の取り組みに関する議論は重要と考えられる。今回の外部評価などに基づき、さらに検討が進むことが期待される。
・大学に在籍する大学院生はIHLIで121人、IEHD169人となっているが、この2つの研究所に在籍する留学生の数が示されていない。留学生の割合は、重要な国際化指標のひとつ。また、業績の審査においては、SCI論文と非SCI論文を別々に分類していただけるとこれら2つの研究所の教員の研究成績を評価する際にレビュー担当者にとってより分かりやすい。
・次世代の育成という点からも、もう少し学生が主体となるテーマ、活動などがみられることも必要に思われる。特に国際交流の場に活動が出てくることが必要と思われる。
・新しい方法の構築（イノベーション創出）のために、特定のテーマに限定した協働研究を検討することもよいと思われる。お茶の水女子大学という特色も踏まえるならば、青年期女性における生活習慣病予防対策の構築というテーマも考えられるのではないだろうか。青年期の人たちに適切な保健行動を行ってもらうためには、知識の要素だけでは難しいと思われ、この年代の人たちにとって意味的価値を持つような対策を提示することが求められる。その意味で、対象を青年期女性に特化することは、意味的価値を考えやすくなることにつながり、これまでにない対応策を生み出せる（イノベーション創出）可能性が高くなるものと思われる。女性に特化した研究であっても、その成果は、男性への対策の検討にも参考となると思われる。このような視点に立ち、可能な範囲で2つの研究所が協働して研究教育活動を行うことを期待したい。
・発達障害のある子どもや青年を対象とした生活習慣病予防も特化したテーマのひとつとなり得ることを指摘したい。発達障害のある子どもや青年では肥満が多いことが知られている。発達障害のある人が肥満となりやすい要因は複数あるが、どの要因に、どの時期に、どのように介入したらよいか、ということに関しては、よく分かっていないことが多い。機構として、もし、余裕があるならば、取組を期待したい。
・IHLIの目的（人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築）も、IEHDの目的（人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査）も、その達成には、子どもの発達や、家族の健康・安全を支える役割を担ってきた女性ならではの視座や洞察、また、研究・教育活動を支えるお茶の水女子大学の「女性のライフスタイルに即した支援体制」（中期目標）が不可欠であると改めて思いました。このユニークな特色・強みがあますことなく活かされ、本機構が国際的な教育研究拠点として

今後さらに発展していくことを期待したい。

・教育プログラムに関して、東大や筑波大では、次世代リーダー育成プログラムとして、「東京大学 エグゼクティブ・マネジメント・プログラム」、「筑波大学 STEAM リーダーシッププログラム」などの取り組みがある。既存の学問では解決が難しい課題に対してどのように取り組むかがポイントとされるように見受けられる。SDGs も同様だが、「ヒューマンライフ」分野もどのあたりを目指すかで変わってくる。

・お茶の水女子大学には、グローバル女性リーダー育成機構の 2 つの研究所（グローバルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所）や理系女性教育開発共同機構、サイエンス＆エデュケーションセンター、また新たに設置された文理融合 AI・データサイエンスセンター等、本機構と関連性の深い研究教育活動を行っている組織が存在する。今後、こうした学内の諸組織との共同シンポジウムの開催や共同研究の実施等、交流を深めていくことも大学全体の研究教育活動の活性化につながる。

＊各委員のコメントは、事務局により表現の統一などによる加筆を行っている。

４　最終評価に向けて（今後の課題）

今回の中間評価については、当初、各評価委員にご参集いただき、当機構、各研究所の概要説明やそれぞれ特徴的な取り組みをご説明させていただいたうえで委員間での議論を踏まえて評価いただく予定であったが、実際には、１）機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価、２）国際的教育研究拠点形成に関しての意見、提言、３）今後の課題についての提言、４）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の４つの観点でのコメントを内外の専門家からなる評価委員からコメントを寄せていただく形で実施した。

それぞれ４つの観点において、各委員とも当機構の設立以降の活動に関して一定の評価をいただき、引き続き目的に沿った活動を継続することが望ましいとのコメントを頂いた。

また、両研究所の有機的連携、分野間の連携、研究テーマの設定など研究活動面での指摘や大学院学生や留学生など人材育成面での活動への言及など幅広い示唆に富むコメントが多く寄せられた。また、評価プロセスでの改善点として、事前にご確認いただいた報告書の内容として十分でなかった点などについてもご指摘いただいたが、第３期中期目標・中期計画期間中の最終的な評価に向けて改善すべき点等について各委員のコメントを踏まえるとともに、設立時の目的等に沿ったさらなる活動の充実や情報発信などさらに当機構が発展充実に努めるとともに、今般の新型コロナウイルス感染症の拡大による環境変化など、将来的な社会のありようも踏まえ、本学の強みを生かした機動的な活動にも留意してさらなる教育研究の充実発展に寄与していくこととしたい。

（中期計画項目（抜粋））

○研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置
　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）を新設し、国際的に評価される研究成果を世界に発信する拠点として、人が生涯を通じて健康で心豊かに過ごすための研究・開発、乳幼児教育・保育の実践研究、人間発達基礎研究、養育環境と子供の発達に関する長期追跡研究や発達臨床支援研究、防災・減災を含む安全・安心な社会環境構築のための研究・開発を行う。【K17】（戦略性が高く意欲的な計画）

○教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）を新設し、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための世界水準の研究拠点を構築する。【K47】（戦略性が高く意欲的な計画）

お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構外部評価の観点（案）

１．機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価
２．国際的教育研究拠点形成に関しての意見、提言
３．今後の課題についての提言
４．その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

（参考）
（ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的）
人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、お茶の水女子大学におけるこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行う。

（ヒューマンライフイノベーション研究所の目的）
人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する国際研究拠点を構築するとともに、成果に基づいた教育プログラムを策定し社会に還元する。

（人間発達教育科学研究所の目的）
人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

国立大学法人お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構評価委員会

2020 年 2 月 17 日現在

森　田　育　男	評価を担当する副学長 産学連携を担当する副学長	第 3 条第 1 項 第 3 条第 2 項
菅　原　ますみ	基幹研究院長	第 3 条第 3 項
坂　元　　章	総合評価室長	第 3 条第 4 項
山　本　　博	公立小松大学長 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
Chang Wen-Chang	台北医学大学理事長 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
齋　藤　　康	千葉大学名誉教授 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
宮　本　信　也	白百合女子大学発達心理学科　学科長 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
仲　　真紀子	立命館大学心理学部教授 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
太　田　裕　治	基幹研究院自然科学系教授 その他学長が必要と認めたもの	第 3 条第 6 項

中間評価タイムスケジュール

2019 年６月　　第１回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
　　中間評価実施について検討開始（実施方法等の方向性検討）

11 月　　第５回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議
　　評価スケジュールの確認、外部評価委員候補者の検討等

　　外部評価委員候補者への打診・内諾

12 月　　学長戦略機構会議にて開催概要の報告
　　外部評価委員に対する委嘱手続き

2020 年１月	第６回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議 評価スケジュール等の確認
２月	新型コロナウイルス感染拡大により、国外からの外部評価委員の渡日を中止とし、書面評価として依頼することとした
	各評価委員へ中間評価報告書（審査資料）を送付
	新型コロナウイルス感染拡大により、全ての委員に書面審査として依頼することについて確認・了承 ＊コメント回答締め切りを 3 月 24 日までとした
４月	各評価委員よりコメント票回収・とりまとめ
	中間評価報告書（案）の作成
５月	中間評価報告書（案）の学長戦略機構会議への報告
	中間評価報告書の公表

資料④　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構「中間評価対応表（2021 年度）」

※本表は、2019 年度に実施された中間評価での意見や提言に対する機構の対策や取り組み（2020～2021 年度）を7つの視点（①国際的教育研究拠点形成・国際連携、②文理融合・異分野連携・学内外連携、③研究テーマ・研究業績・研究活動、④人材育成、⑤情報発信、⑥お茶大ならではの取り組み、⑦その他）からまとめたものである。

	中間評価（2016～2019 年度）での意見・提言	機構の対策 / 取り組み（2020～2021 年度）
国際的教育研究拠点形成・国際連携	・国際化という視点では学会参加、シンポジウム開催などによる交流は見られているが、さらに進んで両国の学生間のある一定の期間の直接交流（海外へ、海外から）、文化融合の交流も必要であり、それらの研究成果が多角的に示されるべき。“文化融合”とは具体的にどのようなことを指しているかを述べた方がわかりやすい。 ・国際的教育研究拠点として確たる評価を得るためには、当機構の研究実績や活動を充実させていくことはもちろん、海外の他機関などに対して当機構に注目させる働きかけを行っていくことなども有用。 ・国際化拠点形成を通じて何を求めているのかを具体的に述べることが必要。 ・海外の当該分野の発達しているところを分析して吸収するとしたら、ぜひ日本人と海外との密なる交流（学生レベルでも教員レベルでも）が必要。日本と海外をミックスした教育システムプログラムを創り、物的、人的国際交流を図るべき。 ・海外の研究者と連携した共同研究を計画、実施できれば、国際的研究拠点としての評価はさらに高くなると思われる。 ・留学生を含む大学院生が機構内の研究に関与している状況が示されるならば、国際的教育拠点としての活動をある程度示すことができるのではないか。 ・組織レベル（各研究所あるいは機構全体）での海外との教育・研究の交流は今後の課題であり、“生涯にわたるこころとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする海外の大学や研究機構との連携を図っていくことが必要。 ・「海外機関と連携した世界水準の国際拠点」という目標に照らせば、本研究機構のメンバーに外国人研究者やポスドク、大学院生を迎え入れ、また、諸国の同じ目的をもつ研究機関との研究交流をさらに活性化することが期待される。	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** HLI 研では台湾から客員教授を招き、国際交流の起点を構築した。2021 年度には計 3 回のセミナーで、本研究所員が研究成果を発表し、日本、台湾、アメリカ、マレーシア、シンガポールからの参加者と活発な意見交換をおこなった。フランスからのインターンシップ学生を受け入れた。 **【人間発達教育科学研究所】** ・2020 – 2021 年度は、感染症拡大の影響を受けながらも、セミナーをオンライン化するなどしながら、以下の活動を行ってきた。 ・ドイツと日本をオンラインで結び「ドイツ社会の多文化化と移民の子育て支援―1970 年代から今日まで」を共催し活発な意見交換が行われた（参加者 154 名）。 ・「研究推進費（論文支援）」の英文校閲費補助を行い、外国人大学院生が海外ジャーナルに論文を投稿した。 ・所員が獲得した科研費で 2 名の留学生（大学院生）を非常勤研究員として雇用し、研究体制を強化した。
	・「これまでにない方法（イノベーションを実現する）」については、この 3 年半の経過では、まだその成果は見られていない。「人の年代ごとに（人間の発達段階に即した）」に関しては、個々の研究の対象は幼児、青年、成人、高齢者と各年代を含んでいるも	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** ・HLI 研究所内では、研究所内及び学内の共同研究を推進する研究テーマを募集し、食品と情報工学、栄養科学と脳科学に関する新たな研究テーマ

文理融合・異分野連携・学内外連携	のの、研究内容がそれぞれ異なるため、それらが統合されたとしても、各年代に適合した健康と生活環境の向上のための方法にまとめられるとは思われないことから、この課題については、目的に沿った取組が行われていないと判断せざるを得ない。 ・この 2 つの研究所間には、まだギャップがあるように感じる。 外部からの脳機能イメージング研究チーム(例えば fMRI、EEG など)を含めた取り組みを行うことなどにより、将来的に異なる精神および神経疾患の研究において IHLI と IEHD の間のより多くの共同研究が促進されると考えられる。 ・今後、必要となることは、2 つの研究所の成果を機構の目的に沿って統合していく活動と思われる。そうした活動には、①機構の目的全体を具現化した総合的な成果としてまとめる方向と、②特定のテーマに特化して深化した成果を出す方向の 2 つがあるとよい。機構としては、前者は必須の活動であるが、後者はオプション的な活動。 ・2 つの研究所の研究教育活動については、両者が有機的に結びついた研究教育活動が見られていない。両研究所のパンフレットでは、全く同じ目標(健やかな育ち・活力ある暮らし・元気な老い)が記載されていることから、両者が連携した活動がひとつも示されていないことには違和感がある。公開シンポジウム参加者の感想でも、研究成果を評価する声がある一方で、機構全体としてのまとまりが感じられないとする意見も見られている。 ・「人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション」という目標に照らせば、シンポジウムなどに見られる分野間連携をさらに進め、各研究分野のより踏み込んだ交流や融合的な研究、例えば、IHLI の 6 部門間の共同研究や、IEHD における実践・基礎・臨床の横断的研究の活性化に期待が募る。ディシプリンの異なる研究分野の共同は常に困難を伴うが、すでに達成されている機構の融合的な交流はそれを可能にし、拠点のさらなる展開をもたらす。 ・“生涯にわたるこころとからだの健康イノベーション”という本機構の目的と方向性を同じくする国内の大学や研究機構、民間企業との連携について、組織レベル(研究所・機構全体)での定常的な交流や共同研究の実施が図られていくことが望まれる。その際には、メンバー個々の研究や研究所内のプロジェクト研究、また両研究所が協働して実施している研究の成果を精査・整理し、発展性のあるテーマを抽出したうえで、外部との連携を推進していくことが望まれる。 ・お茶の水女子大学には、グローバル女性リーダー育成機構の 2 つの研究所(グローバ	の発掘を目指した。 ・人間発達科学教育科学研究所との連携は、共同で行った学内の調査研究データを使い、両研究所から複数の論文が国際誌への掲載に至った。 ・特に、食を中心とするからだの健康には、こころの問題が大きくかかわるが、そのアプローチはライフサイエンス系のみでは解決することのできない問題であった。この成果も含め、2021 年度の健康心理学会では、両研究所によるシンポジウムを企画し、健康心理学という分野での食研究を進める手がかりとなった。 ・学外との連携としては、「食べることのできない状態の QOL を解決する」共同研究に、HLI 研と人間発達研とともに大型研究予算申請を行った。採択には至らなかったが、このテーマは両研究所が鍵となるため、重要な課題として位置付け、今後の研究所や他機関との連携に発展させる計画である。 **【人間発達教育科学研究所】** ・文理融合によるイノベーション創出のためには、双方の視点の違いについて研究者自身が理解を深める必要はあると考える。この目標にむけて、学内科研や各種イベントで連携を進めたことにより、イノベーション実現の素地が整ったともいえる。 ・国立精神・神経医療研究センター、所沢市との連携研究を継続して行った(発達障害児支援)。 ・「グローバルリーダーとは― 今、そして 未来に向けて―(2021.3.27:オンライン)」を学内 5 団体と連携共催し、全学的な情報発信の一端を担った。 ・2020 年度には、東京大学の「食べることのできない状態の QOL を解決する」共同研究に、HLI 研とともに大型研究予算申請を行った。2021 年には、東北大学の「超高齢化する未来社会の課題を解決するための個人と社会のイノベーション」、産学官共創拠点構想 JST 共創の場形成支援プログラムの申請(緑内障予防のための行動変容プログラム)に参画した。採択には至らなかったが、今後の異分野間連携展開のきっかけとなった。 ・人間発達教育科学研究所との共同で本年度企画したシンポジウムを、健康

	ルリーダーシップ研究所・ジェンダー研究所）や理系女性教育開発共同機構、サイエンス&エデュケーションセンター、また新たに設置された文理融合 AI・データサイエンスセンター等、本機構と関連性の深い研究教育活動を行っている組織が存在する。今後、こうした学内の諸組織との共同シンポジウムの開催や共同研究の実施等、交流を深めていくことも大学全体の研究教育活動の活性化につながる。	心理学会の共催で、オンライン発信した（学会参加人数は約 250 名）。 ・本学理学部生物学科主催、IHLI・IEHD 共催の東北大学大学院医学系研究科教授　大隅典子先生による講演会「父加齢の次世代の影響についてエピジェネティクスで理解する」が 2021 年 12 月 17 日に開催された（会場参加者約 60 名、オンライン参加者約 30 名）。
研究テーマ・研究業績・研究活動	・日本における高齢化に伴い、栄養医学や老人栄養などの研究分野が重要になってきたことにより、IHLI の栄養科学部門・食品科学部門・代謝部門の統合プログラムが形成されると良い。・ ・「大規模画像解析による脳浮腫の定量化技術の開発と環状ホスファチジン酸の効果」や、論文「食品のおいしさと健康と安全性の先進的研究体制の確立に向けて」などは今後の発展が期待される ・公開シンポも活発に行われ、食生活からうつ病の治療を指向する更なる研究はその成果が期待される ・新しい方法の構築（イノベーション創出）のために、特定のテーマに限定した協働研究を検討することもよいと思われる。お茶の水女子大学という特色も踏まえるならば、青年期女性における生活習慣病予防対策の構築というテーマも考えられるのではないだろうか。青年期の人たちに適切な保健行動を行ってもらうためには、知識の要素だけでは難しいと思われ、この年代の人たちにとって意味的価値を持つような対策を提示することが求められる。その意味で、対象を青年期女性に特化することは、意味的価値を考えやすくなることにつながり、これまでにない対応策を生み出せる（イノベーション創出）可能性が高くなるものと思われる。女性に特化した研究であっても、その成果は、男性への対策の検討にも参考となると思われる。このような視点に立ち、可能な範囲で 2 つの研究所が協働して研究教育活動を行うことを期待したい。 ・発達障害のある子どもや青年を対象とした生活習慣病予防も特化したテーマのひとつとなり得ることを指摘したい。発達障害のある子どもや青年では肥満が多いことが知られている。発達障害のある人が肥満となりやすい要因は複数あるが、どの要因に、どの時期に、どのように介入したらよいか、ということに関しては、よく分かっていないことが多い。機構として、もし余裕があるならば、取組を期待したい。	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** ・栄養科学部門・食品科学部門・代謝部門で、これまでの発達段階の生活習慣病だけでなく、高齢化社会を目指した、低栄養、サルコペニア、フレイルに研究を広げてきた。特に、多価不飽和脂肪酸欠乏、タンパク質欠乏モデルを使った低栄養状態の脳機能に関する研究を、2021 年の部門を超えた新たな共同研究を立ち上げた。 ・研究員がプロジェクトマネージャーとして立案したムーンショット型研究事業「地球規模の食料問題の解決と人類の宇宙進出に向けたコオロギが支える循環型食料生産システムの開発」が採択され、遺伝分門と食品科学部門がこの研究課題に取り組んでいる。 ・成年女性における生活習慣病予防とその教育のため、成果物として「生活習慣病 Q&A 集」成人編、こども期・高齢者編を作成した。（全学対象の「生活科学部共通科目、食物学概論」でテキストとして使用した）。 ・HLI 研究所で実施した研究結果はアンケートに答えた学生へのフィードバックのため、授業等で説明しており（例えば食費にお金をかける学生の食生活など）正しい食習慣を促す教育に生かしている。1 年生のリベラルアーツでも毎年食と健康に関するゼミを開講している他、本学では大学院で全学対象の食育副専攻プログラムを設置しており、毎年 30 名程度のコース履修修了者を輩出している。 **【人間発達教育科学研究所】** ・2021 年より、新たに加わった研究所員が大学院生と共同し、発達障害の女児の支援プログラムを開始した。発達障害女児の問題は近年注目が集まる課題であり、本学の女子大学の特徴を活かした試みといえる。 ・2020 年学内科研「発達障害の感覚異常の解明」に、研究所の専任教員であ

		る上原准教授と今泉助教が参画し、ヒューマンライフイノベーション研究所の研究所員と共同研究を行った。 ・人間発達教育科学研究所の研究所員が中心となって、高校生を対象とした発達障害傾向と食行動、体型に対する意識、キャリア意識との関連の調査をおこなっている。本調査により発達障害者・児の生活習慣病の予防をはじめ、支援のさらなる充実の一助になる知見を得られることが期待される。
人材育成	・研究活性化の取り組みに関しては、他の部局や全学的な管理業務とのエフォートの調整など、研究活動に集中できる労務上の取り組みも考えられる。 ・大学院生、学部生を積極的に巻き込むことで、広い視野をもつ次世代リーダーを育成することができ、機構の教育拠点としての機能も強化できる。 ・次世代の育成という点からも、もう少し学生が主体となるテーマ、活動などがみられることも必要に思われる。特に国際交流の場に活動が出てくることが必要と思われる。	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** ・管理業務のエフォート管理まではできていないが、学部から研究所の専任に異動した教員は、研究レベルと国際誌への投稿数が飛躍的に増加した。 **【人間発達教育科学研究所】** ・Q&A「発達障害」3 部作発刊前に「女性の発達障害の理解」と「多職種連携支援」に関するオンライン研修を計 4 回開催し、研究所による院生への教育支援としてのべ 40 名の本学院生が受講した。
情報発信	・機構全体として企画された国際シンポジウム(2020 年 3 月:中止)については、良い機会なので予定された内容を資料(日・英)などに纏められウェブ上で公開されることが望ましい。・ ・多数のシンポジウムは面白く魅力的であり、参加者にもたいへん好評でしたが、参加者の約 7 割は女性であり、学生、大学職員が多いことから、学外への発信が十分に行われていない可能性がある。たいへんもったいないことですので、さらなる発信(場合によっては動画配信等)も行われるとよい。 ・イノベーションの語は新しいものを創ることに留まらない。社会への普及をもって完遂することを考えれば、今後、これらの研究成果をベースに、(人材育成を含めた)社会普及への様々な道筋(つまるところ(これまで関心のなかった)世間の耳目を集め、非アカデミアからの資金流入)を探ることも意義がある。	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** 人間発達教育科学研究所との共同で本年度企画したシンポジウムは、健康心理学会の中で開き、オンライン開催した。 **【人間発達教育科学研究所】** ・研究所 HP を通じ、Q&A「発達障害」全 3 冊を広く社会に情報発信し、医療や教育、福祉関係者や保護者等、幅広い層からのニーズに応えた(全3 冊の PDF ダウンロード者数は 1,100 件以上、資料請求(郵送)冊数は 600 冊以上)。 ・人間発達教育科学研究所との共同で本年度企画したシンポジウムを、健康心理学会の共催で、オンライン発信した(学会参加人数は約 250 名)。
	・お茶の水女子大学だからこそ追求、実現できる QOL の定義と将来像が示されるとよい。イノベーションをテコに、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」のようなより高い境地を目指してもよいのでは。 ・お茶の水女子大学は生命・生活・教育科学の分野で、他に類を見ない教育研究の実績	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** ・こころと身体の健康について、女性大生の食生活や閉経後女性の QOL に関する研究も行っている。これらをさらに展開していく。 ・成果として作成した教育テキスト Q&A 集を使って、附属学校園に配布した

お茶大ならではの取組	とポテンシャルを持っており、研究所・部門・分野それぞれの持ち味と強みを活かした機構内外の協同研究のさらなる推進によって、お茶の水女子大学ならではのプラスアルファが香るイノベーションを生み出してほしい。 ・今後、本機構での先端的な研究や啓発活動を、学生・生徒の教育にどのように活かしていくかが課題。ワンキャンパスにナーサリー・こども園・幼稚園・小中高校・大学・大学院が同居している利点を活かし、児童・生徒・学生とその家族、教職員を対象とした幅広い生涯教育拠点としての活動を開発し、展開していくことを期待したい。 ・IHLI の目的(人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築)も、IEHD の目的(人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査)も、その達成には、子どもの発達や、家族の健康・安全を支える役割を担ってきた女性ならではの視座や洞察、また、研究・教育活動を支えるお茶の水女子大学の「女性のライフスタイルに即した支援体制」(中期目標)が不可欠であると改めて思いました。	り、附属での教育に取り入れるなどの附属との教育連携を行った。 **【人間発達教育科学研究所】** ・健康教育支援プログラム開発の一環として作成した教育テキスト Q&A 集を、附属学校園や関係機関に配布、附属と連携し教材開発を行い、附属校園教材・論文データベースを充実させた。 ・附属校園のテーマ別部会(研究会)の活動に人間発達教育科学研究所の連携研究員(附属校園＋大学)が参加し、研究推進に協力している。 ・お茶の水女子大学附属学校園連携研究 算数・数学部会と共催で統計教育に関するシンポジウムを定期的に開催した(計 5 回)。 ・ヒューマンライフイノベーション研究所と共同し、女子大学生の健康行動に関する調査を行い、国際誌への成果発表、国内外での学会発表を行っている。 ・2017 年、お茶の水女子大学が培ってきた特色ある保育実践研究の創成を目的とし、附属幼稚園・文京区立お茶大こども園・いずみナーサリーは、教育・保育施設形態の違いを超えた「三園合同研究会」を発足させた。2021 年には三園の実践者と大学の研究者が協働して「保育マネジメント研究会」を立ち上げ、実践研究を推進するとともに、学会発表やフォーラム開催を通じた地域社会に向けた情報発信を行っている。また、学生や保護者にも開かれた、リカレント教育である、保育・子育て支援ラーニングプログラムを運営している。 ・インフルエンザ予防接種促進のための実験的な教材を作成し、附属学校を対象に効果について検討した。
その他	・【評価方法】本機構の目的の達成度を測定する上で、いくつかの指標を追加してもよい。中間報告書からも本研究機構の研究教育活動、女性リーダーの育成、世界水準の国際拠点等の達成度は読み取れるが、加えて研究者のジェンダー比率を年齢や職位別にカウントする、学生の業績も明記する、外国人メンバー、外国人研究者・ポスドク・院生等の受け入れに関する資料等も提示する等により、より一層、多側面からの評価が可能になる。	**【ヒューマンライフイノベーション研究所】** ・最終報告書に入れる予定。 ・両研究所長とも女性なのは対外的には強みかもしれません。 **【人間発達教育科学研究所】** ・最終報告書に反映させたい。 ・研究所の研究ミッション遂行のため、6 年間でのべ 6 名の客員教授、7 名の

		客員研究員、51名の研究協力員を受入れ、研究体制及び学外連携を強化した。 ・お茶の水女子大学 SDGs 推進強化プロジェクトにおいて、持続可能な健康教育、社会連携・協働のあり方を広く社会に発信する研究成果として Q&A 集を紹介した。

資料⑤　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
最終評価実施報告書

１　はじめに（最終評価の目的等）

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構に設置した 2 つの研究所（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業などについて、全体構想に基づき、6 年間（平成 28 年度～令和 3 年度）の進捗状況を確認の上、最終的な評価を行う。特に、令和元年度に実施した中間評価の結果を受け、研究プロジェクト、事業内容、組織実施体制等の見直し・改善が適切に遂行されているかを確認・評価した。

また、今回の最終評価に際しては、評価委員会（午後）に先立ち、これまでの研究・事業の成果に関する国際シンポジウム（午前）をオンラインで開催した。

各委員の先生方におかれては、年度末で多忙のなかご協力頂き、この場を借りて感謝申し上げたい。

今回の最終評価により、第 3 期中期目標・計画を達成するとともに、「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」が自他共に認める国際研究拠点としての基盤を固め、第 4 期に向けたさらなる発展と進化をめざしたい。

２　評価の方法等

最終評価の実施に当たっては、本学の基幹研究院長のもと、３名の外部委員を含む計６名の委員会構成員により、あらかじめ配布・送付された最終報告書による書面評価により行われた。

最終報告書は、機構及び各研究所の概要、構成などの資料に加え、2016 年 4 月から 2021 年 12 月までの各研究所の研究業績、シンポジウム等の活動実績等の計 500 ページを超える資料（全 3 部）を各委員によりご確認いただき、１）機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価、２）融合研究に関しての意見、提言、３）今後の課題についての提言、４）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言の４つの観点でのコメントにより評価をいただいた。

また、評価委員会に先立ち開催された「国際シンポジウム」にもご参加頂き、各研究所の主要な研究プロジェクトや事業についても直接ご意見ご助言を賜りご評価いただいた。

新型コロナ感染防止対策としてオンライン(zoom)で開催された評価委員会の議事進行については以下のとおりである（国際シンポジウムのプログラムは別添資料参照)。

＜ヒューマンライフイノベーション開発研究機構　令和 3 年度最終評価委員会＞

【開催日】 令和 4 年 3 月 14 日（月） 14:00 ～ 17:00

【開催形式】オンライン（zoom）

【議事進行】：

14:00 – 14:05 委員長挨拶、本日の議事進行説明

14:05 – 14:40 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構概要説明等

・機構の概要説明、取組の全体構想、平成 28 年度～令和 3 年度取組実績についての説明　　（石井クンツ昌子　機構長）

・ヒューマンライフイノベーション研究所　成果概要説明

（藤原　葉子研究所長）
・人間発達教育科学研究所　成果概要説明
（大森　美香研究所長）
14:40 – 14:50　休憩
14:50 – 15:50　機構の個別研究内容説明（6 人×10 分）
宮本　泰則教授、森光　康次郎教授、千葉　和義教授
内海　緒香特任講師、上原　泉准教授、今泉　修助教
15:50 – 16:35　評価委員による質疑、コメント、意見交換
16:35 – 16:50　評価委員による協議（打合せ）
16:50 – 17:00　まとめ、今後のスケジュール確認

３　評価委員からのコメント概要

各評価委員からは、計６年間の研究・活動実績に対し、概ね肯定的なコメントをいただいた。
また、今後の課題や展開について、さまざまな視点からの指摘や提言をいただいた。
各評価委員から寄せられたコメントの概要は以下のとおりである。
（＊各委員のコメントは、事務局により表現の統一などによる加筆を行っている。）

１）機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価

・ヒューマンライフイノベーション研究所は、多額の研究費を学外より獲得し、盛んな研究活動を展開していることが評価できる。人間発達教育科学研究所は、むしろ目の前にいる子どもや心的疾患を持つ人々のために尽力することにおいて重要な働きをしていることを評価すべきと考える。小冊子「Ｑ＆Ａシリーズ」の刊行についても、特に精神医学的内容の巻が多く読まれているのは、こうした事柄について、専門家集団により信頼できる情報を出している機関が少ないためであろうが、それは社会的な地位の高さを物語っていると考えられる。
・機構の目的である教育研究拠点の形成のために，ユニークかつ先端的な研究が行われており、学生の発表数や Q&A 集の作成・配布など教育に対しても貢献されている点は高く評価できる。
・各研究所のパフォーマンスについては上述のように個別の研究遂行については高く評価できる。ただし目的にあるように「国際研究拠点の構築」ということについては、少々具体策に乏しい感がある。海外研究者を招へいしてのシンポジウムなどの企画を行ってきていることは評価できるが、実質的な「国際研究拠点」としての地位を確立するには、海外から参加発表の応募が積極的にあるようなテーマの国際ワークショップやシンポジウムなどの企画が立てられることが期待される。
・期間中、HLI 研究所と人間発達教育科学研究所では、各年度、約 50～150 件の論文（うち半数は英文による）、約 10～70 件の国際学会での発表や国際会議での講演が成果として出されており、研究・開発に関わる高い水準での活動が行われていると判断できる。期間を通して約 90 件にのぼるシンポジウム等が開催され、先端的な研究推進とアウトリーチ／ディセミネーションの両方が意欲的に行われており、さらに、期間を通して受託研究 36 件、受託事業 38 件、共同研究 82 件に加え、文理融合的な研究活動が行われるなど、国内外の研究機関や企業との連携や社会に向けた発信という目標に向けた活動も行われている。特に、

6 冊の Q&A シリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており（ダウンロード数などから)、これらのことから、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると判断できる。

・Ⅰ期（2016～2017 年）は、ヒューマンライフイノベーション研究所（IHLI）と人間発達教育研究所（IEHD）のどちらも、それまでに行ってきた研究・活動から機構の目的に沿う内容のシンポジウム・研究会・セミナーなどの開催が中心の時期ととらえることができると思われる。機構としての特筆すべき活動は乏しいといわざるを得ないが、異分野を融合した研究組織の黎明期の状況としては特に問題とされるものではないと考える。Ⅱ期（2018～2019 年）は、IHLI では研究部門の再構築や研究プロジェクトの立ち上げ、IEHD では大規模調査・縦断調査の実施や若手への研究推進事業の実施など、2 研究所とも機構としての活動を意識した研究活動が活発化し、機構の目的である「心身の健康と生活環境の向上」に資する研究発表が飛躍的に増加し、特に英文論文数が大きく増えている点は特筆に値すると思われる。Ⅲ期（2020～2021 年）は、2 研究所が協働しての活動が開始された時期といえる。コロナ禍もあり、協働活動の多くは 2021 年度の実施となっているが、状況を考えると仕方のないことと思われる。むしろ、コロナ禍で突然の遠隔授業等の大変な教育を実施している中、複数の協働活動を行い、大型研究費申請を行うなど、2 研究所ともよく活動したと評価される。以上、機構に設置された 2 研究所は、機構の目的を踏まえた活動を 6 年間実施したと判断する。一方で、2 研究所が協働しての研究活動は緒に就いたところとも言え、その点は、今後の機構の活動に期待したい。

・社会構造の変化に伴う社会的課題の解決を目的とする本機構は、理系主体であるヒューマンライフイノベーション研究所と、文系主体である人間発達教育科学研究所との協奏的研究によりその目的を果たしていると言える。人数が少ないながらも、様々な分野の研究者を擁するお茶の水女子大学の特徴を生かして、多方面からのアプローチが試みられており、一つ一つの研究についても興味深く、ユニークな成果を生み出している。多くのシンポジウム等のイベントも行われており、活発な活動であったことが見て取れる。

・2020 年の中間評価で、「お茶の水女子大学ならでは」の観点から、「すべての女性がしあわせな一生を送れる未来づくり」といった、高い境地を目指してほしい、と提言した。昨今、健康寿命に加え、「幸福寿命」というコンセプトが登場している。これは、「死ぬ瞬間までしあわせな一生を」との考えで、慶應義塾大学の伊藤裕教授によって提唱された。生物学的な生命寿命、医学的な健康寿命、社会的な幸福寿命、これら三者が一致する、それが、人生の理想であるにちがいない。「生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごす」には、健康寿命の延伸に幸福寿命の延伸が伴われていなければならず、すると、必然的に、ライフサイエンス、ソーシャルサイエンス両者の協同が求められる。また、幼少期の養育から、青年期の学び、さらには、壮・老年期の学び直し・学び足しに至る、生涯を通じた学修も重要な軸となる。この意味で、次項に述べる、貴機構を構成するヒューマンライフイノベーション研究所と人間発達教育科学研究所の transdisciplinary な連携が強化され、実績も上がりつつあることは高く評価されると思う。

２）融合研究に関しての意見、提言

・中間評価において、両研究所の融合的な研究を期待する声があったこと、また海外機関とのさらなる連携を求める声があったことは了解した。まず、ヒューマンライフイノベーシ

ョン研究所に関しては、ムーンショット計画のような大きなプロジェクトを持っていることを考えれば、学外機関との連携について、積極的な能動性を発揮していることは明らかであろう。一方、人間発達教育科学研究所に関しては、研究と実践とが強く結びついている領域であり、共同研究の相手を求めてあちこち手を伸ばすことが本来の姿とは必ずしも言えないのではないだろうか。教育や臨床医療は「イノベーション」の枠で捉えられない面があるように思う。

・これまで多くの「文理融合」を掲げているものを見てきたが、実質的な融合は非常に難しいというのが現状である。その点、本機構の実績から判断するに、かなり実質的に融合がなされた研究が遂行されていると思われる。共著として両分野の研究者名が並ぶ投稿論文の存在が、実質的な融合研究が行われた証拠になると思うが、そのような論文実績が複数あるのは非常に高く評価できる。文理の融合した研究であることが強調できるように、例えば、研究業績一覧において、両分野の著者を色分けして示し、一つの論文に両分野の著者が共著となっていることが一目瞭然となるような業績の示し方をすると、融合度合いを示すのにわかりやすいのではないかと思う。懸念される点としては、どちらかの分野が主となり、他方の分野がその補助的な役割となりがちな偏った傾向の融合形態となっていていないかということである。どちらも主となるパターンが満遍なく存在することが望まれると思う。

・機構における文理融合型共同研究として、「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究−本学学部学生を対象としたパネル調査から−」（2018 年度採択）、「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析」（2020 年度採択）が実施されている。いずれも二つの研究所の連携による心身の健康の創出を目指す研究であり、前者では大学生を対象とした心身の健康や生活習慣等の調査を踏まえ、栄養学・心理学的な知見にもとづく教育プログラムの開発が行われました。後者では発達障害をテーマとする細胞レベルの研究や感情理解、感覚異常等の心理学的研究が行われ、発達障害に関わる要因、その現れ方の多層性に対する理解が深まった。いずれも文理融合のアプローチにより、当該のトピックにおいて新しい地平を切り開くことができたと思われる。

　提言としては、今後も、例えば栄養学のトピックを心理学の研究課題として取り上げたり、細胞の定量的な振る舞いと行動科学的な指標との関連性を追求するなどして、融合領域独自の課題・問題を設定し、そのような研究を支える交流を持続的に行うことで、文理融合の意義をさらに深めていかれることを期待する。また、成果の発信・社会実装から得られるフィードバックを新たな研究課題として取り入れていくことで、スパイラルな発展が見込まれると思う。そして、このような融合領域に若手研究者や、例えば、ダブルディグリープログラムなどを通して大学院生を招き入れることで、さらなる融合の拡充が図られると推察する。

・「1. 評価」で述べたように、機構内の 2 研究所の融合研究は、歩み始めたところと理解している。お互いの研究内容を紹介しあうセミナーなどを機構内で定期的に持ち、お互いに寄与できることを探索する作業もあってよいように思われる。ときには、学外者にも参加してもらい、意見を聞くのもよいかもしれない。開始されているプロジェクトにおいても、協働できる余地はあると思われる。

　例えば、ムーンショット型農林水産研究開発事業の代表機関となっての『誰も飢えさせない』プロジェクトが該当する。その研究成果は大いに期待されるところであるが、一方、昆虫食には、心理的抵抗感を持つ人は少なくなく、そうした心のバリアーへの対応に関す

る研究も併行することが望ましい。その点に IEHD が協働できることはあるように思われる。また、「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」プロジェクトは、高齢者の低栄養問題を生命科学分野から検討しようとしていると解されるが、高齢者が低栄養となる背景にはさまざまな心理社会的要因も関係しているとされており、IHLI と IEHD が協働できる点があると思われる。されには、高齢者の低栄養は女性で多いことが知られており、女性に多い理由とその予防対策まで進めることができれば、まさしくお茶の水女子大学の研究機関として大きな役割を果たすことができると思われる。

・中間評価の際には、文理融合研究の不足について指摘されているが、最終報告では、二つの共同研究が報告されている。中間評価の際には、機構全体としてのまとまりが感じられないと言う意見もあったが、実際に実験科学と調査研究の接点を見出すことは簡単なことではなく、その取り組みは評価すべきである。文理融合研究の進め方の開拓という側面からも、このような取り組みを通して得るものは大きいと思う。今後、継続的な取り組みによりさらに深く融合した研究が行われ、文と理とで共同研究することによる意義を示すことを期待している。

・研究所内の共同研究としては、ヒューマンライフイノベーション研究所における生化・代謝学部門と栄養科学部門の「脳の健康維持に及ぼす食の科学的・実践的アプローチ」、糖鎖科学部門と遺伝学部門の「腸内フローラ形成に関わる宿主因子の検証と新たな in vitro 腸内細菌培養法の開発」など今後の展開が期待される。「こころとからだのサイエンス」を標榜する貴機構ですから、二つの研究所間の連携および融合研究が切に望まれる。本事業の期間内に行われた取り組みとしては、文理融合学内科研とその研究発表会、融合研究の実績としては、秋篠宮紀子特別招聘研究員ほかの人間発達教育科学研究所メンバーと神原容子特任助教ほかのヒューマンライフイノベーション研究所メンバーの共著としての『Q & A シリーズ 炎症・感染症』の刊行、日本健康心理学会第３４回大会企画シンポジウム「食行動と心身の健康―心身医学・心理学・栄養学からのアプローチ―」の開催などが、transdisciplinary な連携の萌芽として高く評価される。

３）今後の課題についての提言

・「Ｑ＆Ａシリーズ」のような啓蒙活動は意義があると考えるが、シンポジウムの開催などはどの程度有効なのかがわかりにくい。研究成果の公開ならば、専門の学会等で発表すればよいようにも思う。「また、イノベーション」に重点を置くのであれば、企業向けの周知イベント的なものがあればよいのかとも思う。あるいは、教育や医療関係のことであれば、教員や保育関係者、臨床心理士などを対象にしたセミナーの方が有効であるかも知れない（そうした職種の人はなかなかセミナーに出席もできないと思うが)。

　イベント類については、誰に何を伝えるためのものなのかが、もう少しはっきりした方がよいのではないか。大型プロジェクトの「キックオフシンポジウム」の類いは、何かのセレモニー的な意味合いがあるのかもしれないが、当方の属する領域では見かけない習慣である。

・次年度からヒューマンライフイノベーションからヒューマンライフサイエンスへ名称変更するという理由が明確ではない。個人的には主眼を「研究技術開発」から「利用・応用」へと移すという意味ではないかと思うのだが、異なる狙いがあるとすれば、その狙いを明確に示してもらいたい。イノベーション（技術革新）の実績としては、論文数や特許数が目標としてわかりやすい。しかしライフサイエンスの実績として、何を具体的に目指すの

か、という目標設定に関わる問題である。第 4 期の計画として、これまで得られてきた知見を活かし、「実用的アウトカムを目指した実装研究を進める」という設定は大変良いと思うのだが、何を評価軸とするのか、その設定を明確にされると良いと思う。

・今後に向けた提言としては、本機構の目的の一つである「成果の社会に向けた発信」に関し、Q&A シリーズを英語や中国語などに翻訳し、web ページに掲載すること、また、研究の進展に応じて、一定期間ごとにアップデートしていくことなどが期待される。また、同じく、目的の一つである「国内外の研究機関や企業との連携、文理融合研究の推進」に関しては、機関間のより密な交流や、研究者・学生の相互受け入れ、上述のようなダブルディグリープログラムなどを通じた、複数の分野に卓越した研究者の輩出が望まれる。そうすることで、さらなる連携、融合的な研究の推進や、成果のアウトリーチ・社会実装を可能にするサイエンス・コミュニケーターなどの育成が可能になると思われる。

なお、国際拠点としてのさらなる発展を目指すには、外国人研究者や学生の受け入れの拡大が有効かもしれない。HLI 研究所の構成メンバー比率を見ると、女性比率は 5 割、若手比率が 1-2 割であるのに対し、外国人比率は 2-4%となっている。外国人（特に若手）比率の目標値を決め、達成に向けて検討していくことで、さらなる発展が見込まれると思われる。パンデミックにより対面による国際交流が困難である一方で、インターネットを介した交流はむしろ容易になっているように思われ、こういう点も利用できるかもしれない。

・機構における最も大きな課題の一つは、設置 2 研究所の役割分担の整理と思われる。言うまでもないことではあるが、文理融合は人文系と理系の研究領域を単に一緒にすればできるものではない。共通の目的とその目的に寄与できる研究分野の融合でなければ、うまくいかないことは、多くの大学で経験してきていることである。「2。」で述べたような、2 研究所間の情報交換の場の設定、さらには、2 研究所に留まらず、学内の研究者からのリクルートも含めて分離融合型研究の推進が求められているように思われる。

国際的な研究拠点構築の課題も大きいと思われる。海外の研究者との交流は見られているが、共同研究まで発展しその成果を発表する段階までは至っていないように感じられる。海外との研究交流、特に若手の研究者の派遣と海外からの受け入れを推進する制度を構築し、コロナ禍が収束したあとには実施できる体制作りを今から考えるとよいと思われる。

・今後の課題としては、文系と理系が近くに存在するお茶の水女子大学ならではの取り組みである文理融合研究の発展に期待している。また、国際活動については、コロナ禍終息後の発展に期待している。

・かつて感染症が中心であった子どもの疾病構造は、いまや非感染性疾患が中心となり、虐待、肥満、心身症、発達障害、アレルギー、不登校、不慮の事故などがふえてきている。かつて Battered Child Syndrome という疾病をはじめて知ったとき、日本には対応する用語さえなく、遠い外国のできごとと思ったものだった。が、今日では、わが国のどこにも起りうる日常の問題となっている。虐待のみならず、どの非感染性疾患にも、さまざまな外因あるいは環境要因が関わっている。したがって、発達段階に即した心身の健康と環境の向上をめざす貴機構とその活動は、学術的および社会的な意義と価値を増しはすれ減ずることはないと考えられる。とりわけ、（1）二つの研究所が協同して行う教育学および生命科学両面からの多角的なアプローチと、（2）長期にわたる prospective な study が重要である。後者に関しては、たとえば、「小さく産んで大きく育てる」のは必ずしも正しくなかった、栄養不良だった胎児は成人すると２型糖尿病やメタボリック症候群を発症しやすい、といったイギリスからのリポートなどが参考になると思う。

４）その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

・学問は「人のために役立つ」ものばかりではないと思う。先生方・学生さんの研究の価値を評価するのに、「～に役立つ」ということをそんなに強調しなくてもよいのではないだろうか。当方の属する人文科学の世界から見ると、やや違和感を覚える場面があった。

・本機構においてはお茶大ならではの取り組みを重視されていると思う。女性ならではという視点は勿論だが、付属学園との連携を規模的に考えてもこれほど密接に行える研究教育機関は珍しいと思われる。これまで人間発達教育科学研究所においては、 その利点を存分に活用し、今後も活用するという計画とされているのは良いと思う。 一方でヒューマンライフ側では、この利点を活用しきれていない感がある。 勿論、研究分野として活用しにくい面があることは重々承知しているが、上記、３。 の記述にも関わり、今後「実装研究を進める」ということであれば、その実装の場として附属学園との連携を活用することは可能であると思われ、「お茶大ならでは」のライフサイエンス研究となれば良いと期待する。

・中間評価における意見、提言にも丁寧に対応され、国際的教育研究拠点形成、国際連携、研究テーマ、人材育成、情報発信、お茶大ならではの取り組み等について、真摯に取り組まれていることも確認した。「からだ」と「こころ」、「幼児期から高齢期までの発達に則した生活環境」は、先端研究と社会実装をつなぐ、ますます重要な領域となると思う。5 年半にわたる取組みをさらに持続的に深化、拡張、更新していかれることを期待する。

・ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的は、「生命科学」と「成長・発達に関する科学」の知の融合と、得られた知を基に健康で活力のある生活を送るための支援方法の開発（イノベーション）ということができるように感じている。そのように考えた場合、IHLI のサイトで掲げられている『健やかで活力ある人生を作る「こころ」と「からだ」の健康イノベーション創出』の表現は、少し違和感を覚えるところがある。「こころ」と「からだ」を入れ替え、『健やかで活力ある人生を作る「からだ」と「こころ」の健康イノベーション創出』ではどうだろうか。「からだ」の解明はメカニズム（機序）の解明であり、「こころ」の解明はコンテンツ（内容・人が生きてきた歴史）の解明と考えるからである。どちらも不可分であるが、身体がなければ心は成り立たない。IHLI の研究分野を考えると、IHLI は、こころを考えるためにもからだが大切であることをもっと打ち出してもよいのではないだろうか。

・Q&A シリーズの冊子は、2 研究所の研究成果を社会に発進する意味でも評価できる成果物と思われる。一方で、評価委員会の時にも述べたが、この冊子を小学校、中学校の児童生徒の教育に活用するには、このままでは表現、内容とも難しいと思われる。小学校、中学校の教育にも活用することを考えているのであれば、附属学校の先生方と協働した教材作成を行うのがよいと思われる。

・ASD 女児だけのグループ活動「あまなつ茶ぁむ」は、女性の発達障害が注目されている現状から、タイムリーな活動と思われる。一方、女性の発達障害の人たちは、青年期以降に気づかれ、あるいは、問題が顕在化し、悩むことも少なくないことがいわれている。特に、女性の ASD では、青年期以降に自殺企図が多いことが指摘されており、青年期における精神的支えの重要性がいわれている。このようなことから、是非、青年期の女性 ASD の人を対象とした支援活動（研究に結びつけて）を考えていただきたい。

・質問にもでていたが、冊子の利用についてもっと宣伝をしたらよいと思う。ネット上では信用できない情報が流れている中、それぞれの分野の専門の先生からの分かりやすい解説が載せられており、もっと世の中に出したらよいと思った。本が固く（物理的に）開きに

くく、表紙が硬く（デザイン的に）手に取りにくいように感じられたので、装丁を工夫すると良いと思う。また、どのような人向けなのか、「〇〇の基本を知りたい方へ」などの情報を入れるのも手に取りやすくなるかと思った。

・ヒューマンライフイノベーション研究所では、海外との共同研究は、2021 年より再び増加傾向にあるものの、依然特定の一部教員に限られており、また、ほとんどの共同研究は未だ国際共著論文への結実に至っていないように見うけられる。2050 年までを視野に入れた「ムーンショットプロジェクト」は真にすばらしいと思うが、SDGs を冠に掲げる諸研究は、SDGs の一部の Goals の「つまみ食い」、「いいとこ取り」の感なきにしもあらず、2030 年までの約束ごとである SDGs のさらに先を見据えた中長期的な視点やグローバルな展開への意欲、ビジョンに乏しいように思われる。

・人間発達教育科学研究所では、第 1-2 期にはスリランカ児童を対象とした研究、7 カ国をフィールドとした研究、国際メタアナリシスなど目を引くものがあった。第 3 期では、COVID-19 パンデミックが autism(Kamio ほか)、eating disorder risk and symptoms（Omori ほか）、food waste（Omori ほか）におよぼした影響に関する研究が光る。「国際的な研究・教育活動」を謳う貴機構だが、「国際的な拠点形成」に至るには、さらに、峰を高くし、かつ、すそ野をひろげる努力が必要かと思われる。

４　最終評価総括および今後の課題

今回、中間評価での進捗状況の報告を受け、ご意見や改善点も対応するとともに長期（６年間）にわたる取り組みについて、評価をいただいたところである。

途中、コロナ渦により協働活動の進捗が妨げられたが、その中においても高い評価を受けるに至る活動を行えたことは、今後のヒューマンライフイノベーション開発研究機構に設置した 2 つの研究所（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）の研究プロジェクトや事業実施において、大変有意義なものであったと考える。

特に、6 冊の Q&A シリーズは、一般に関心の高いトピックにつき、科学的根拠にもとづく内容を平易に伝える教材、啓発資料として有意義に用いられており、機構の目的に対しての取り組みが達成され、成果の社会実装の進捗状況も良好であると自負している。

上記により、本学における第３期中期計画・中期目標の達成にも大いに貢献できたと自負し、今年度から開始となった第４期中期目標・中期計画においても文理融合型の研究活動を推進し、国際研究拠点の構築に向けた取り組みを行うことにより、本学の国際化をリードする機構を目指していく所存である。

（中期計画項目（抜粋））

○研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置
　ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）を新設し、国際的に評価される研究成果を世界に発信する拠点として、人が生涯を通じて健康で心豊かに過ごすための研究・開発、乳幼児教育・保育の実践研究、人間発達基礎研究、養育環境と子供の発達に関する長期追跡研究や発達臨床支援研究、防災・減災を含む安全・安心な社会環境構築のための研究・開発を行う。【K17】（戦略性が高く意欲的な計画）

○教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構（ヒューマンライフイノベーション研究所、人間発達教育科学研究所）を新設し、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための世界水準の研究拠点を構築する。【K47】（戦略性が高く意欲的な計画）

お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構外部評価の観点（案）

１。機構の目的に対しての取り組みや進捗状況についての評価
２。融合研究に関しての意見、提言
３。今後の課題についての提言
４。その他の機構の活動に関するご意見・ご提言

（参考）
（ヒューマンライフイノベーション開発研究機構の目的）
人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点として、お茶の水女子大学におけるこれまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう総合的、国際的な教育研究活動を行う。

（ヒューマンライフイノベーション研究所の目的）
人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発及び安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する国際研究拠点を構築するとともに、成果に基づいた教育プログラムを策定し社会に還元する。

（人間発達教育科学研究所の目的）
人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

国立大学法人お茶の水女子大学
ヒューマンライフイノベーション開発研究機構評価委員会

2022 年 2 月 17 日現在

浅　田　徹	基幹研究院長	第 3 条第 3 項
大　瀧　雅　寛	基幹研究院自然科学系　教授 （その他学長が必要と認めたもの）	第 3 条第 5 項
矢　島　知　子	基幹研究院自然科学系　教授 （その他学長が必要と認めたもの）	第 3 条第 5 項
山　本　　博	公立小松大学長 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
宮　本　信　也	白百合女子大学　副学長 （外部有識者）	第 3 条第 5 項
仲　真　紀　子	立命館大学総合心理学部　教授 （外部有識者）	第 3 条第 5 項

＜最終評価タイムスケジュール＞

2021 年 6 月 23 日	第 1 回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議 最終評価（国際シンポジウム含む）実施について検討開始（日程、プログラム、評価委員案等）
9 月 24 日	第 2 回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議 日程、プログラム、評価委員の確認、決定
11 月 30 日	第 3 回ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議 評価日程、開催方法、コメント票等の確認・検討 外部評価委員候補者への打診・内諾
12 月	外部評価委員に対する委嘱手続き
2022 年 2 月中旬	評価委員会開催通知、資料送付
3 月 14 日	午前：国際シンポジウム開催（オンライン） 午後：評価委員会開催（オンライン）
3 月 31 日	評価委員コメント票提出締切
4 月	各評価委員よりコメント票回収・とりまとめ
5 月 9 日	ヒューマンライフイノベーション開発研究機構会議 最終評価実施報告書（案）及び最終報告書（案）の検討
6 月下旬	最終評価報告書（案）の作成
7 月 12 日	学長戦略機構会議にて報告
7 月中旬	最終評価報告書、最終報告書の公表（ウェブページ等）